

其年も暮なんとして學校の冬期休暇が近づいた。篤子は踊や三味線を済ますと既う短い日がじみくと暮れ出す。半ば明りく半ば闇い黄昏時に、歳末の景氣を装ふ町の灯を見ると何となく涙ぐまれるやうに淋しい。乳母と文太郎の住つた家は物置同様にされて、入口の土間に黒犬が毎も小さくなつて眠つて居る。お濱が居なくなつてから飯を與るものもないので彼は近所の流元や掃溜を求餐つて漸やく生きて居る。其代りに身體に生疵が絶えなかつた。而して夜の間は此處に眠つて居る。「俺が大きくなつて世帯を持つ様になつたら魚を食はしてやるから待て居ろよ。」と仙七は毎も言た。

篤子は夕暮に此處へ来て犬を弄つたり仙七と話す事が一日中の一番の楽しみであつた。話よ毎も乳母と文太郎の噂であつた。篤子は文太郎の手紙を見せ二人で讀

では眼に涙を湛めて一日も早く會ひたいと語り合つた。金杉といふ處は屹度好い處だらう、海は無いけれども淺蟲の様な處だらうと思つた、篤子は何を聞ても淺蟲を思ひ出すのである、而して虎公の事も仙七に語り聞かした。

「強いんですね、其那強い人は屹度今に豪くなりませせ」

顔は知らないが仙七は篤子や文太郎に由て虎公を懐かしく思つた。

這那話をして二人は時の經つのを忘れる事が屢あつた。爾いふ時には琢磨が血相を變へてやつて來る。

「何をしてるんだ仙七、何の話をしてるんだ」

仙七と篤子に何か秘密でもあるかの様に彼は猜疑の眼を睜つて飽くまでも問ひ寄るのである。言はなければ撲られる、柔道の極意を用ひられる。頭から水を浴びせられる。仙七は泣顔になつて辯解する、其れでも聞かない時には毎も篤子が臆面もなく琢磨の前に立塞がつて言ふ。

「貴方が無理だよ」

篤子が何か言ふと琢磨は急に元気が無くなつて了ふ。而して例の活動寫眞を施してにこ／＼しながら篤子を連れて奥へ引込むのである。

氣が荒いに拘はらず琢磨は篤子だけには優しかつた。お小遣をお時に強請つてはリボンや簪やカッドや文房具などを買て來て篤子に與る。篤子が嬉しさうな顔をするると彼は眼も鼻も崩れる様な相好をして家中の者に對しても手當りが優しい。時としては柔道の大先生が篤子の飯事の相手をして人形を前に並べてほく／＼してゐる事もあつた。

其れを見ると毎も喚き立てるのは環であつた。

「兄さんは篤子さんにばつかり種々なものを買て與つて私には何にも呉れない、損するわ私損するわ」

「お前には澤山あるぢやないか」

「あつても兄さんが篤子さんにばつかり：：お母さんに吩咐けるわ私」

「吩咐けたつて可いやい、畜生！覺えて居ろ」

「可いわ吩咐けるわ、兄さんが篤子さんに惚れてるんだわ」

「馬鹿ッ」と琢磨は眞紅になつて怒り出した。

「其那事を言ふと是だぞ」

拳骨に呼吸を吹き掛けて虚勢を示したが利目がない。

「兄さんが惚れてるんだつて吩咐けてやるわ」

「惚れてるつて何なの？」と篤子は突然に訊き出した。琢磨は急に慌て、益眞紅になつて怒鳴た。

「馬鹿／＼／＼」

篤子には又もや新らしい疑問が起つた。

總五郎とお時の仲違ひは段々に烈しくなつて來た。互に顔を紅めて大きな聲を出し合ふ事がある。平常に生花茶の湯禮法と口喧しいお時も此時だけは荒々しく疊を蹴立てる、襖をがたびしさせる、而して奉公人一同に八當りをする。とこの結果頭から蒲團を被つて寐て了ふ。若も恚ういふ時に篤子が心配さうに「叔母さん什麼して？」と問ひ寄らうものなら大變だ。彼女は幾度か枕を抛り付けられた。形勢不穩と見て取た琢磨や環は賢くも滅多に傍に寄り付かない。獨り篤子が悲しげに叔母の枕元を看護のであつた。

家庭といふものは温かいものだ、楽しいものだ、決して喧嘩などはするものでないと信じて居た篤子は毎も恚ういふ事件の度に身を慄はして怖れた、室へ歸つて獨りで泣いた。音に其ればかりでない、お祖父さんは叔母さんと自分とを引離

さうとする、叔母さんは御祖父さんと自分とを近付まいとする。篤子は何方に就て可いか解らない。

更らに不思議なのはお祖父さんの室に毎晩二三の女客が見へる事である。内玄關から入つて來て「今晚は」と言たきり勝手に座敷へ通る。時としては三味線の音が聞へる、爾かと思ふと夜明けまで密やかに札を打つ様な音が聞へる事もある。女は奇麗に化粧して襦を取て來るが、廊下を通る時に折り／＼長襦袢を膝の上まで出して歩いてるのもある。

「あの御客様何あに？」と篤子は或夜聞いた。女中共は笑つた。

「あれは藝者です」と一人が答へた。

「藝者？」と問ひ返して篤子は慄然とした。曾時先生が女の中で一番不可い商賣をする者が藝者だと教へた。其の不可い者が遠慮もなくお祖父さんの室へ出入りして居る。

「何故お祖父さんが藝者なんかを家へ入れるの？」

「御用が御ありなさるからです」と女中は今一人と顔を見合はせてにやりと笑つた。

「どんな御用なの？」

篤子は小さき胸の疑を晴らさずには置かない。女中共は益々笑つた。

「私共には解りませんからお祖父さんにお聞きなさいまし」

「藝者は不可いものだつて本當？」

「えい爾ですとも」

是だけは先生の言葉と女中の言葉と一致して居る。不可いのに何故家へ入れるだらう、篤子は繰返し／＼考へた。而して何かお祖父さんが藝者に苛められるんぢやなからうかと危ぶんで見たり又何だつて彼那奇麗な身装をしてるんだらうと多少の猜ましい心も起つたりした。

其夜の事である。お祖父さんの室にどんちやん騒ぎが始まつた。三味線の音、唄の聲が夜の静さを破つて中庭を隔てた南側の子供室まで響いた、此夜は環はお時に遠ざけられて篤子の室に寝ることになつた。

「あら活惚を踊つてるわ」

「今度は甚句だわ」

「行て見ませうか、藝者の踊は巧いわよ」

「えい行きませう」

篤子と環は賑かな音に釣り込まれ、廊下へ出た。其處で仙七も一緒になつた。

「叱られやしませんか」と仙七が言ふ。

「此處に居ても聞えるんだもの叱られやしないわよ」と環が言ふ。

三人が長い曲りくねつた廊下傳ひに押戸を押すと其處はもう宴の座敷である。

障子の腰硝子から座敷の中が白晝よりも明りく見える。三つの小さな顔が其處に

並んだ。

と篤子は先づ度肝を潰して驚いた。藝者が五人とお時！男と言たら總五郎一人である、二人は三味線を弾いて唄ふ。

「金比羅ふね〜追手に帆掛て…：テンツルテツテチ…。」

二人の藝者を相手に長襦袢を丸露しに白い脛を見させて疊の縁を渡り歩きながら尻を振て居るのはお時である。其の亂痴氣な騒にお構なしに床の間に腰を掛けて章魚の様に赤くなり、一人の藝者の首に片手を掛けて我が顔に引寄せて片手に酔いものものを箸に摘み藝者の口に入れてやらうとしているのは總五郎である。

「もう澤山よ」と藝者は顔を反ける。

「まあ俺の思ひが籠つてるんだからな、耻を掻かすものでないよ」

藝者は不精〜に口に啣んで「おう酢ばい」

「俺のだから甘い積だがな」

「倍けまあす」と向の三味線を弾いてる女が妙に長く聲を曳いて言ふ。

「いよう、御兩人！」

「色男ウ」

「恪くな〜」と總五郎はにやりとして仍且絡んだ手を放さない。

「お父さん、娘の前ですよ、少とお静かにね」

とお時はから〜と笑つて「娘は一人者ぢやありませんか可愛さうに」

「役者買でもするかね」

「お差圖にや及びませんよ、ねえ高吉さん」

「よう〜」と高吉が囁し立てる。

篤子には何が何んだか薩張解らない。只だ彼女の血が一度に熱したかと思ふと急に冷たくなつた。「大變に恐ろしいものを見た」といふ心持だけは自分に解つた。

「旦那がああ藝者に惚れてるんだ」と仙七が小聲に呟やいた。

惚れてる！篤子はびくりと頭を動かした。

曾日の疑問がぼかんと雲の中に穴が明いた様に解けた。「惚れるといふ事は悪い事だ、卑しい事だ、女の中で一番不可ない藝者のする事だ、其れをお祖父さんが

篤子はがた／＼と身を慄はして廊下を逃出した。

八

篤子は早く眼覺めて枕に頭を着けたまゝ、何かしら大きな問題——學校の試験間近の不安な思ひの様な——に觸れた様な氣持で霎時動かずに居た彼女の頭に絶えず昨夜の光景が往來した、藝者は不可いものだといふ事が解りかけた、今まで只だ神秘の天地として疑問の中に葬り置いた大人の國の一端が閃と見え初めた。而して凡てが恐ろしく醜惡であると思つた。

漸々起きて顔を洗ひ朝飯を済まし外へ出て遊んで歸つた頃は最早十一時近くで、此時お時は漸と床を離れて火鉢の前で煙草を喫して居た。別に毎時と異つた處もないが篤子は何となく親しみ難い氣がした。

「お早うございます」とお辭儀をする。

「何です」とお時は眉を動かして煙管を抛げ出した。「其のお辭儀は何です、禮法

の先生が其那お辭儀を教へましたか」

篤子は黙つてお辭儀を仕直した、が廊下へ出ると急に口惜しくなつた「叔母さんだつて昨夜お酒を飲で膝の上まで露して變な踊を踊つて居た癖に」憊う思ふと今まで曾て経験しなかつた反抗心が猛然と彼女の柔和な胸に波立たした。

「此那事を思つちや不可ない自分は子供だから」彼女は直ぐに思ひ返した。思ひ返したものの彼女の頭にはお祖父さんと藝者其れに叔母さん、いやな踊、酒の香が何時までも遣つて離れなかつた。女中共がお祖父さんの噂をする、何とかいふ藝者が御氣に入で、近頃は又た新しいのが出来たとか、お時が某といふ役者が最負で柏の紋の付いた手拭でなければ使はぬとか、其れから其れと蔭口を言ふのを聞く毎に篤子は顔を赤めた、彼女は厭な話や卑しい話を聞くと顔を赤める様になつた。

嬉しいお正月が来た、篤子は友禪の着物を着て長い袂を振り／＼羽根を突く事

が一番楽しみであつた。元日二日三日は飛ぶが如くに過ぎた、五日は南家の吉例として親戚や知合の人々を招待して新年會を開く事になつて居る。お時は朝から大騒やつて新座敷を掃き清めた。床には蓬萊山の三幅對を掛ける、花瓶には御自慢の遠州流を發揮する、茶室の飾付け、應接室、便所まで一點の隙もない凝り様で、其れが濟むと風呂に入て自分の身装に取掛る。年は四十でも髪が黒く襟足が長く水々と若い。額に小皺があるにせよ、少し尻の下がつた眼と小さい口元は十六にもなる子の母とは見えない。彼女は飽くまでも地味な装で、此日だけは縫模様の黒紋付に茶地の西陣の帯を締めて居た。

「まあ奥様大變に地味で被居やいますね」と女中が言ふ。

「何に見えるだらう」

「さあ、如何しても華族様の御後室様」

「歌右衛門の淀君……」と言ひかけた一人は餘りに適中しやしまいかと思つて直

ぐ口を結んだ。全く南家の淀君といふ評が世間にもあるので。

けれども歌右衛門に似たと言はれたり華族様と見られた事がお時に満足であつた。彼女は幾度も姿見の前に立ては客室へと行く、整然とした身装、肅しやかな態度は何處から見ても長襦袢を捲つて金比羅を踊つた人とは思へない。篤子は不思議に思つた、而して此の方が本當の叔母さんだと思つた。

九

お客があるといふ事は子供に取て嬉しいものである、何となく陽気で家中が春めき渡つて、正月の晴衣と結び立ての髪が美しく夕早き電燈に輝く。篤子は小鳥の様に庭の飛石を傳ひ人々の間を縫ふて歩いた。「美しい容色だ事！」人々の聲が聞えるともなく聞える。篤子に其れも嬉しかつた。けれども彼女の胸に一點の曇があつた。其れは藝者が來るといふ事である。勿論餘興の爲めに來るのであるが、御祖父さんに御酒を飲ましたり叔母さんに厭な踊を教へたりする藝者なる者に對して彼女は心の底から憎惡を感じて居る。其の藝者なる者が今ま篤子が環と共に大きな羽子板を抱いて立てるのを少し離れて區々の批評をして居る。

「まあ何といふ奇麗なんでせう」
「何方が好くつて？」

「此方の方が好いわ」と眼で篤子を指す。

「容色が好いけれどもお人形様の様ぢやないの、其れよりも彼方の方が色つばい處があるわ」と一人は環を指す。

「でも髪が多くて眼がぼつちりして此方とは比べものにならないわ」

「だつて彼方の方は男好のする顔よ」

無遠慮な評が折り／＼篤子の耳に聞える。篤子はふいと足を返して次の室へ引込んだ。

只だ賑かに只だ騒々しく宴會が段々と進んだ、時が移るに従つて來客の氣も浮き立つて笑ひ聲が春を此家を集めた。環は人々に抱かれたり擁擁はれたり、長い袂を翻して來客のお世辭と稱讚を浴せられて居る。篤子は黙つて同じ處に座つて居た。

餘興には落語、浪花節、長唄、琵琶唄、其れから手品も濟んだ。

「お嬢様の踊を是非に」恚ういふ緊急勸議を提出したのはお時の一番氣に入の髪結さんであつた。一同悉く賛成した。

「どうせ拙いんですけれども……折角ですから」とお時は篤子と環に目瞞せした。

「私拙いのよ」と環は嬌羞をして立上つたが篤子は顔を眞紅にして俯向いた。平

際でさへ拙い／＼と言はれてるものを、大勢の前で踊れるべき筈がない。

「さあ什麼したの？」

篤子は漸く心を決めた。踊は「新版歌祭文お染久松道行！」と半田が可笑しな節で口上を言た。次の間へ支度に出がつた篤子は「道行？」と問ひ返して頭を掉つた。

「さあ下稽古をなさいまし」師匠が三味線を弾いて稽古に掛る。藝者共がぐるりと圍繞いた。篤子はお染で環が久松である。お染が轉ぶと久松が扶け起さうとする。其れから唄と踊になる。「今も昔は河原町……」曲が進むと卑しい文句が段々に烈しくなる。

「小さい時からなまなかに手習までも一つとて何やら草紙へ書いたのを其方に見せて問ふたれば、戀といふ字と云ふたのが、結び初めの殿御ちやと思ふて居る。其の様な：：」

篤子にはびたりと疊に坐つて顔を臆面もなくお時に向けた。

「厭です、叔母さん、踊は厭です」

「どうして？」

「どうしても」

篤子には憊う答へるより外に言葉が無かつた、彼女自身すら何の爲に厭なのか解らないのである。

「厭ならお止し」とお時が腹立聲に言ふ。

「なさいましょ、お客様の御所望ですから」

・師匠が斡旋す。

「厭たわ」篤子は犯すべからざる決心を眼色に表はした。「踊は厭です、其代りに學校の唱歌なら何でも唄ひますわ」

「もう可いよ」とお時は立上つた。

「今夜から一人で離室へ御寝なさい」

離室といふのは父篤彌が呼吸を引取た室で女中共は幽霊が出ると言て恐がつて居る。篤子は思はず悚然としたが直ぐに胸を落付けた。厭な踊を踊るより幽霊座敷に寝る方が勝である。

「踊は厭です」と再び繰返した。

「剛情な子だね」とお時も流石に呆れて座を去た。

謝罪つても聽かれぬ。篤子は歡樂に酔ふ人々の動搖めきを後にして一人幽霊座敷に追ひやられた。室は幾月か鎖されて箒を入れた事すらない、冷たい空氣がひいやりと肌を迫ると何處からとなく微臭い匂が隙間風の様鼻を衝く。其處に五燭の電燈が埃を被つた笠のまゝ薄暗く垂れて居る。

「お一人で御休になるんですよ」憚う言ってお勝といふ女中が突慥貪に夜具を其處に抛り出して去つた、後は静かにしみ／＼と寒さが襟元に浸み込む。篤子は壁に映る我が影法師を見て思はず泣き出した。

「乳母！／＼」と彼女は聲を惜んで呼んだ。乳母は元より來るべき筈がない。彼女は抛り出された蒲團の上に突伏した。蝶々に結たお下髪のみ、ばんは壁に映つて長く慄へて居た。

「篤子様／＼」何處からとなく呼ぶ聲がする。篤子は不圖面を上げた。竹格子を組んだ半窓の外から仙七の顔が見えた。

「大丈夫ですよ、私が此處に居ますから恐い事は無えや」

「仙どん」と言つた篤子は、頼母しさと共に悲しさが猶も昂じ上た。「仙どん、仙どん、乳母の處へ連れて行て頂戴」

悲しいに付け嬉しいに付け思ひ出すは仍且お濱の事である。

「御道理です」と仙七も両手で涙を拭き、「其りや私も爾思ふけれども今夜は不可せん、明日までお待ちなさいね、ね、ねえ篤子様」

篤子は黙つて首肯した。

「誰だいな其那處に居るのは」

大きな聲が二人の耳を劈いた。お時は何時の間にか其處に立て居る。

「仙七！お前は用があるから勝手の方へ行てお居、此處へ來ると承知しないよ、

可、戸一更らに篤子に向いて、「私の言ふ事を聴かないと何時でも是ですよ、可い
かい、此處はねお前の御父様が死んだ處で、幽霊が出るんだよ、恐くないかい、
其れでもお前は剛情を張り通すかい」

「踊る事だけは御免なすつて」と篤子は敷衍りあげた。

「同じ事を幾度いふの？ 彼那にお稽古して踊れないなんて、其れは我儘です」

晴の場所に環と並んで踊らして我子の技倆を客人達に誇らうといふ計畫が外れ
た恨は此の位の悪口で收まるべくもない。「何故踊らないんです、何故です」

「叔母さん私踊が嫌ですから」

「何故嫌です」

「踊はね」と篤子は涙を拭き、「言た。踊はね、藝者のする事だから」

「何ですつて？」とお時の語勢が一段と烈しい。「藝者のする事ですつて？」
「学校の先生がね、藝者は女の中で一番不可いものだつて……」

「ふうむ」とお時の鼻息が荒かつた。

「生意氣な事を御言ひちやありません、お前だつて藝者の子ぢやないか」

「えつ？」と篤子は全身に水を浴びせられた様に驚いた。顔は全く色を失つて居
る。

「お前はね、藝者の子だといふんですよ」

「本當？」

「嘘だと思つたら御祖父さんに聞いて御覽」

「本當？」

「うるさいね」

「本當？」

「うるさいと言ふに、まあ今晚は此處で一人で寝るが可い、幽霊が出るよ」
恚う言ひ捨てお時は去つて了つた。と窓の處に仙七の姿が再びひよこりと現は

れた。

「仕方が無い篤子様、今夜は此處に従いて居られないんです、大變な事になつたな、私は此處に手文庫だけを持って來ましたからお淋しくともお人形か御本で恐い事を忘れるんですな、なかに幽霊なんか出やしません、困りましたな私が従いてあげたいんだけど今ま目付かつたもんだから、あゝ呼んでる、左様なら篤子様、恐い事無えんだ」

周章と言ひ終つて彼は手文庫を窓から横に狭し込み、悲しさうに篤子を振返つたが聽て庭の間に隠れて了つた。正月の風が捕込を鳴らすと、其處らの雨戸や柱、軒の邊が怪しい音を立てる。奥には霞を隔てた別天地の如く三味線や鼓の音が遠く聞える。篤子は窓から手文庫を取て硝子戸を閉め、其儘坐つたさきり霎時動かなくなつた。

「藝者の子〜」恚う繰返すと涙が止め度なく降りしきる。手文庫を開くと小

な人形や種々な本が出る。彼女は人形を抱き上げて凝と顔を見た。

「ねえ坊や、藝者の子ぢやないわね、幽霊なんか出やしないわね」

天井の隅から隅へと鼠の走る音がする、篤子はびくりとして人形を眸と頬に當てた。

「私藝者の子ぢやないわねえ」

人形の涼しい眼は首肯くが如く篤子の濡れた眼と照り交はす。正月の夜が次第に更けて歸宅の車の音が長く續いた。

夜が次第に更け初めた。篤子は泣き疲れて霎時夜具に凭れて何を思ふともなく四邊を見廻した。奥の室では來客が既に去たと見えて、戸締の音、廊下を歩く音、膳碗の觸るゝ音など途切れ〜に聞えたが、最後に誰やらが風呂場の方で大きな欠伸をしたかと思ふと其れからは廣い此家は古寺の如く寂莫と冷へ渡つた。篤子は黙つてこそ〜と蒲團を敷き展べた。鐵の様に冷たい寢衣に着替へて脱いだ着物を疊み、お人形を抱きながら蒲團にもぐり込むと身體はぞく〜する程寒い。

「幽霊が出るだらうか」彼女は又もや恐怖に打たれた。出るものにしても出ないものにしても明日の朝まで此室に居るより仕方がない、慙う思つて居る中に彼女の心が段々落着いて終りには反對の心強さが萌して來た。

「お父様が此室で死んだのだ、御父様の幽霊なら出て構はない」

彼女は父の最期を憶ひ出した、今一足早かつたら御父様の聲を聞く事が出來たのだ、一體御父様は私に優しい人だつたか知ら、何故私を召だのだらう。御父様は仕方がないとしても御母様は什麼したのだらう、死んだのか生きてるのか、其れさへ判然解らない。

此時矢の如く篤子の胸を突いたものがある。「お母様は藝者か知らん……いや爾那事はない、けれども若し藝者だつたら」

篤子は夜具に顔を埋めて泣いた。

「御母様が藝者だつたら私學校へ行かれやしない、お友達にも顔が出せない、私死んで了ふ」

「神様！」と彼女は思はず叫んだ。

「どうぞ〜お母様が藝者でない様にして下さい」

憊う念じてる中に彼女は何時の間にか眠くなつた。けれども篤子は眠れなかつた。餘りに悲しい餘りに不思議な事件が我が身に急に降り掛つて來たので。

彼女は疲れた眼をしよぼ／＼さして再び眠らうとした。天上の鼠が一度に騒ぎ立てて轉び廻る。どたんばたん落ちる音、柱を引掻く音が止むと、今度は悉く下へ降りたと見えて袋戸棚の中であた／＼暴れ廻る。中には何やら嚙む様な音を立てるのもあればチユウ／＼鳴いてるものもある。篤子は恐々ながら戸棚の方を見やつた。下の戸棚が一寸許開いてある、初め其處から鼠が一寸顔を出した、暫らく室内の様子を覗つて居たが聽て小さな舌を出して自分の手を嘗め初めた。其れが止むと思ひ切つて身體を半分許出す。ひよいと飛び出して柱の暗い蔭に隠れる。先登の無事なのを見て二番目が出る、三番四番、四五匹の鼠が続いて出て思ひ／＼の隅々に走り寄る。と間もなく徐々歩を進めて、此の珍客の周圍を取巻く。第一に近付いたのは人形である。

「恐い——」と篤子は不圖眼を開いて泣き出した。不意打を食つた鼠は一度にはつと散た。篤子はもう身體中が慄へて齒の根も合はぬ。今にも鼠が自分に食ひ付きはしまいか。篤子は憊う恐る／＼かく鼠の方でも人間を恐れた。ちり／＼歩みに一匹二匹と元の戸棚に逃げて行く。／＼と息を吐いたが又もや出て來はしまいか。篤子は恐る／＼戸を閉めやうと手を伸ばした。閉めても閉まらない、又た閉める又た開く。と見ると其處に紙束が挟まつてある。篤子は其れを取除けた。紙束の袋を洩れて一通の書付がばらりと零れる。拾ひ上げる途端に彼女ははつと胸を跳らした。中味の封筒に憊う書いてある。

「篤子へ遺言——父より」

遺言の二字が解せぬにしろ、篤子は父より自分へ書残した書面だといふ事だけは解つた。彼女は夢心地に其れを拾ひ上げて再び蒲團に潜り込んだが、其れを開いて見る氣もなく其儘懐に押付けた儘、疲は全身を襲ふてぐつすりと眠つた。

霜寒き正月の夜は明けた。薄すりと雨戸に朝日が射しても臺所では未だ起きた者もない。昨夜新年會の疲れに全家は擧つて朝寝して居る。仙七は獨り冷たい蒲團から起き出した。先づ心に掛るは篤子の身上である。彼は帯を巻き付けるや否や顔も洗はず幽霊座敷に駆け込んだ。篤子は人形を抱いたまゝ眠つて居る。

「篤子様」

小聲に呼ば聲が眠り穩かならぬ篤子の耳に入たと見えて篤子は直ぐに眼を覺ました。

「恐かつたでせう」

「えい恐かつたわよ」

「幽霊が出ませんでしたか」

「幽霊が出ないけれども鼠が出たわよ」

篤子は思ひ出して懐を探つた。夢の様に思つたのは事實であつた。

「鼠がね、憚那物を曳いて來たのよ」

「何ですか」

仙七は篤子の出した書付を手にとり取眼を圓くした。

「若旦那の遺言狀！是ですく、あゝ好かつた」

「どうして？」

「大旦那と奥様と此の書付を血眼になつて探して被居やるんです、是さへあれば貴方は今日から此那家に居なくても可いんですよ」

「どうして？」

「だつて若旦那が御自分の財産を貴方に御譲りなさるといふ御遺言ですもの」

「財産は何あに？」

「お金や地所や家の事です」

「其那ものは私要らないわ」

「冗戯ぢやありません」

「だつて御金は御祖父さんや叔母さんが下さるし、此の家は皆なの御家ぢやないの？」

「駄目だなあ」と仙七は歎息して。

「篤子さまにや未だ解らないんだ」

彼は立て袋戸棚を開けた。鼠の尿の臭がふうんと鼻を衝いて、襦袢の様な紙屑々、鳥の羽根や玩具の破片や、何かしら餅の干固まつた様なものや薬の袋皺だ

らけの氷囊なごまで混雑／＼に詰め込まれてある。

「あゝ解りましたよ」と仙七は戸棚に突込んだ頭を引いて。「床板が二重になつて居たんです」不圖思ひ出したのは篤彌が死ぬ二三日前の事である仙七が人なき折を見て室へ入ると篤彌は瘠せさらばひた脊中を向けて、野良犬が盗み食をする様に、何時の間にか此處まで匍ひ出して戸棚に頭を突込んで居たのを見た。「若旦那」と聲を掛けると、どうして彼那力が出たかと思ふ程、びくりと身體を引いて凝と自分を睨んだ。其の顔の恐ろしさは今だに忘れない。「おう仙七か」と若旦那は安心したらしく戸を閉めるまでは閉めたが、動けない、仙七床へ連れて行てくれ、早く／＼と言て倒れた。漸々蒲團に寝さした時彼は呼吸苦しげに言た。「仙七！頼むよ、戸棚を……誰にも／＼」未だ何か言ひ度さうであつたが其時看護婦が見えたので口を噤んだ。仙七にもものを言つたのは是が最後であつた。仙七には何の事だか解らなかつた。考がへて見ると此の爲であつたのだ。

「多勢奉公人もあり、親もあり姉もあるのに此那大事な事を頼む人は一人もなかつたのだ、只た一人！其れは私だ、私の様な子供を力にして被居たのだ」恚う思つて仙七はしく／＼泣いた。

「ぢや是を什麼したら可いの？」

「爾ですな」と仙七も遺言状の始末に困つた。

今にも人々が起き出したら最早其れまでだ、總五郎とお時が代り／＼に。

「遺言状の様なものをお前に渡しやしなかつたか」と訊問した事がある。仙七は子供ながらも十六歳、店の掛引まで知て居る。此の書付を見せたら直ぐに二人に捲あげられる位は解つて居る」

「兎に角讀で見ませう」

仙七は封を切て讀み初めた。

一三三

元より子供の事であるから讀める處もあり讀めぬ處もある。けれども大體の要領だけは解つた、當家の地所家屋及び公債五萬圓は篤子に譲り渡すといふのである。

仙七は更らに戸棚を捜し出した。床板が二重になつて其處から公債が幾枚となく現はれた。

「どうしても誰にも見せない方が可いでせう、若旦那が恚うして隠して置いたのも他の人が物騒だと思つたからでせう」

篤子には無論恚うといふ考へがない。

「でもお祖父さんや叔母さんに秘して置くのは悪い事ぢやないの？」

「悪いもんですか、悪い事なら貴方の御父様だつて恚那處へ隠して置きなさりや

「しません」

「爾々爾だわね、御父様のなさる事に悪い事はないわね」

篤子は金や財産に何の執着もない、凡て仙七の言ふ通に従つた。仙七は遺言状と株券を反古紙に幾重にも包んで、兎角打案じたが。

「仍且揚げ板の下に置くより仕方がありません」と言た。而して彼は鼠の出ぬ様にと大きな猫を一匹紙に描いて包と共に入れ、板には嚴重に釘を打付けた。

勝手には既に女中共が起きた様子である。兩戸を繰る音も聞える。朝日がすがすがしく板戸を漏れて篤子の蒲團に節穴の形を落した。

「大丈夫ですよ、誰にも言ちや不可せん」

憊う言て仙七は忍び足で室を出た。篤子は蒲團を疊んで戸棚に入れ、自分で兩戸を明けて室内を掃き清め、其れから顔を洗つて茶の間へ行た。總五郎もお時も琢磨も環も未だ起きなかつた。一人鞆然と膳に向つて居る中に彼女は急に悲しく

なつた。何といふ理由もなく涙がぼろ／＼零れる。食事を済まして室へ歸らうとする廊下で彼女は昨夜の藝者に逢つた。眠足らぬ顔は青褪めて、髪はばさ／＼に亂れ、白粉が荒つばい地肌に残つて、胸ばかりを合はした寢衣の裾は八字に開いて弛さうな腰に伊達巻をした儘、平氣で廊下を通り行く。

「お早う」憊う言て藝者は篤子を見下し、「いくら眠つても未だ眠いのよ」

全然友達にでも物を言ふ様、篤子は又しても一種の反抗心を以て藝者を見返した、而して黙つて室へ歸つた。

或學者は憊う言ふ。人間の知識はゴム毬の様なもので、小さく打てば小さく弾む、大きい問題に觸るれば大きく進歩する。篤子は殆んど一夜の中に極めて複雑な極めて大きな問題に逢着した。母が藝者である事。父が澤山の財産を自分に遺した事。其の遺言状は祖父にも叔母にも見せてはならぬといふ事。

若し大人だつたら什麼なに驚きつ惑ひつ悶へる事であらう、けれども篤子は單

純である。「大きくなつたら解るわ」只是れだけで解決しやうとしたが扱て小さな頭に受けきれぬ疑が夏山を出る雲の如く續々として湧いて来る。彼女は霎時人形を弄つて遊んだ、仍且不安が去らない。手文庫の中を見ると文公が遺して行た「一日と一生」といふ本があつた。彼女は何處を披くともなしに披いた處を讀み下した。本は日記體で毎日の感想を書いたものである。

「正しい人は正しい道を見る、人間の眼は顔の正面に付いてる以上は、人は正面を見るべきものである。世間では裏面を見たがる人が多い様だが其れは心の邪なる人か拗くれ者か臆病者である。慙ういふ人は何時も人を疑つたり世を恨んだりするのである。廣い世界に悪人がない。人を悪人と思ふのは自分が正しくないからである。」

篤子は難解しいと思ひながらも幾度も繰返した。繰返してゐる中に彼女の顔が赧くなり眼が生き〜と輝やいた。

巢立ち

心に留めれば塵も眼に立つが、心穩かなれば震雷も耳に聞えぬ、篤子は眞直に育つた。什麼な暗い事厭な事恐ろしい事でも彼女は毎も明るい心持で其れを解釋した。

「少し抜けてるわ」

「あんまりお人好だよ、仍且田舎者だね」

お時と環ばかりでない。女中共まで慙う言た。稀には一同で揶揄半分に淺蟲の田舎唄を篤子に請求する。篤子は平氣で大きな聲で唄つて見せる。學校の體操もして見せる。琢磨を敵にして綱引もする。「全然男の様だ」と人々は笑ひ囃す。笑ひ囃された篤子は裏面に嘲笑の意が籠つてある事を知らない。人々が笑へば自分も笑ふ。

「お轉婆の行爲は出来るけれどもお作法や踊や三味線が出来なければねえ」
女中共は環へのお世辭に毎も憊う言た。篤子は爾いふ蔭口を耳にせぬでもなかつた、けれども彼女は憊う思つて居る。「皆の言ふ事は本當だわ、私は不器用なんだから」

小學校を卒業したら一人で乳母の許へ行ける様になるだらう。篤子が楽しみに待て居た其年も來た。

「ねえ叔母さん」と彼女は卒業證書をお時に見せて言た。「私卒業しましたから御褒美に乳母の許へ遣つて頂戴ね」

「まだ忘れないの？」とお時は眉を寄せた。

「爾那に乳母が戀しいのかい」

「だつて叔母さん私乳母にも文ちゃんにも逢ひたいんですもの」

「どうせお前はね私の子ぢやなし、私よりも乳母の方が可からうけれども、其れ

ば少し待つて貰はなければ困ります、お前も今は大切の時だから、又候田舎者の悪い行儀を仕込まれては折角是までにしたのが臺無しになるからね」

「其れぢや不可いなの？」

「もう少しお前のお行儀が善くなつたら」

篤子は溫和しく諦めた。自分が田舎で育つたから踊も三味線もお作法も不器用なんだ、して見ると乳母に逢はせない叔母さんが言ふ事も道理の様に思はれる、乳母に逢ふ事を許されるには藝事を勉強するより他に道が無い。彼女は一生懸命に勉強しやうと決心した。

篤子の學校に就ても總五郎とお時の間に議論の花が咲いた。環が華族女學校へ通つてゐる以上は篤子も同じ學校へ遣れと總五郎が言ふ。「環は環です、篤子は親もなく財産も無いから手職を覺える學校の方が可いでせうとお時が言ふ。議論は毎もの如く總五郎が「どうでも可いや」といふので終局になつた。無論篤子は

祖父さんや叔母さんの取計らつてくれる事には異存を懐くべきものでないと思つて居るものゝ多分環さんと同じく華族女学校だらう位は彼女の頭に動いて居た。子供の時には何が一番楽しみかといふに學校ほど好いものがない。學校の先生は世界中で一環さんと思つて居る。自分の學校！自分の先生！これほど好いものは他にあらう。卒業式に先生に別を告ぐる時の悲しさ、同時に新たな學校へ入る時の嬉しさ。悲しさにつけ嬉しさに付け子供の慰安も矜持も希望も凡て學校にあるのである。

お時が規則書を取寄せたり、女中共に探さしたりして漸やく決めたのは芝愛宕下何番目の曲り角に生徒募集と書いた雨曝しの廣告を出して居る玉蘭女學校といふのであつた。今まで一度も聞いた事がない名なので篤子はお時に訊ねた。

「叔母さん什麼な學校？」

「中々善い學校です、生徒さんが二百人もあるさうですよ」

「あまり聞いた事はないわね」

「いゝえ田舎へは聞えないでせうが、東京では中々流行る學校ですよ」

「爾？まあ嬉しいわね」

篤子はほく／＼喜こんだ。

玉蘭女學校といふのは日露戦争後の創立で日は浅いけれども生徒が多い。其れは校長前原夫婦の敏腕に依るのである。前原の名は壽一、夫人の名は假名子である。此の夫婦は何處から出て来たのか明らかでない。一説に依ると露西亞の片田舎で洗濯屋をして居たとも言ふ。けれども當人達は米國で學問をしたのだと言て居る。

夫婦は極めて勉強家であつた。最初は學校の拭掃除まで二人でやつたもので、當時は電燈が普及せられぬ處から洋燈を重に使つた、寄宿生の室々を見舞つては假名子が石油の減り様を研究し芋ホヤを廢して三分心に改めたといふ程の節儉家である。前原は腰が低く物言が如才なく、而して一週に一度は必ず父兄の宅を訪問し廻つた。恚ういふ風なので生徒よりも父兄が先づ校長夫婦に惚れ込んだ。一

二年の中に生徒がどしどし殖える。三年で卒業する。卒業後は夫婦二人で一生懸命に奔走して嫁入の世話をする。一期の卒業生の中で二人とも華族へ一人は豪商へ嫁したものがあつた。其れが此學校の運の開けた端緒で、其れからといふものは夫婦は學校の教育よりも結婚の媒介に夢中になつた。寫眞を送る見合をさせる、時には歌の會茶の湯、琴や三味線のお蔭、まで夫婦が御供をして執事や乳母の如く立働く。其方の収入が月謝よりも遙に多い。

お時が篤子を此校へ入學させやうとしたのは初めは只だ三年で卒業といふのに惚れ込んだのであつた。大抵の女學校は五年である、二年早いだけでも費用が減る譯だ、お時は恚う思つた。が一度び校長夫婦に逢つたので全然其の如才ないのに惚れて了つた。

「はあお嬢様はお幾歳で、成程、其りや餘所の學校では無駄なものを教へますから五年も掛りますが、此の學校は凡て時間を儉約して餘所の五年分を三年で充分

仕上る様にして居ます、まあ此の名簿を御覽下さいまし、當校出身の方で華族方の令夫人におなりになつたのは二十六名、勅任官が十二三名、實業家が五十七名、佐官以上の軍人が……」

良人が吹聴すれば假名子もはけて居ない。

「何に致しましても御年頃の御嬢様を御預り申すんでございますから、其りや一通の苦勞では御座いませぬ、良くなりましても悪くなりましても御友達次第でございますから、當校では第一に御身分を調べまして餘り如何はしい方はお断りする事に致して居ります、只今では華族様や代議士の御令嬢が十五六人御入學になる事になつて居ります、御邸の御嬢様が御入り下さると當校に取ても什麼なにか名譽でございます、其りや貴方方様や華族様には特別の待遇法もございますから華族同様に待遇されたのでお時は頗る氣に入た。彼女は故意と鷹揚に身體を反らして金の入齒の見える様に口を斜に微笑した。

「其れでは一つ御厄介を願ふ事に致しますが實は其の……」

「左様でございますか、いゝえもう御成績に依りましては一年位は跳び越す事が出来る様に規則がなつて居りますから」

「え、落第しても構ひませんが何分我儘ものですから何卒餘程厳しく……」

「厳しくと申しましても御邸の御嬢様方は……」

篤子を御嬢様と言はれたのでお時はぐつと癪に障つた。

「なにね、厳しくしないと不可せんですよ、どうも嘘を吐くのが病でございますから……」

「へえい」と二人は呆れたが直ぐに感服した。我娘の缺點を明らさまに打明けて教育を頼むとは普通の母親には出来ない心掛である。

「いやどうも全く御慈愛が深くて被居やるには恐れ入りました」

「いゝえ何、其れに仲々剛情者ですからね、萬一すると私の讒訴を言ふかも知れませんから何卒其邊は御含を願ひます」

「御母様の讒訴を？」と校長は眉を擡めた。

「いゝえ私は母ではありません、私は伯母ですから」

「へえい、では貴方の御嬢様では……」

「えい、私の娘は華族女學校へ通はして居ります」とお時は再び反身になつた。

「へえい」と校長夫婦は煙に巻かれた狸の様に眼をばちくりさした。

三

恩に背いて不義を働いた者は、自分の罪を庇ふが爲に先潜りをして恩人の悪口を言ひ廻る、お時は丁度其れであつた。平素に篤子を虐待する、自分ながら寢覺が悪く、若しも篤子が自分の悪口を校長夫婦に言ひはしまいか、彼女は其れが恐ろしい爲に篤子を嘔吐さして了つた。嘔吐者にして置けば篤子が何を言つても信じられまい。

縦令我が娘でないにしろ初めての入學者を紹介するに嘔吐者だといつた人は此の學校創立以來會て無い事である。校長夫婦が若しお時の人格に立入て考へたならば、篤子を思ふ愛から出た言葉であるか、但し毒氣を含んだ言葉であるかは明かに解る筈であるが、二人はお時の身分、身装に酔ふて其れには氣が付かなかつた。氣が付かぬながらも只だ此の不思議な言葉に呆れた。

其れとも知らずに篤子は愈々學校へ通ふ事となつた。毎月の小使錢は一圓の當がひ扶持である。一圓の小遣錢は學校用品やりぼんの一本も買へば直ぐに消えて了ふ。彼女は築地から愛宕下まで電車に乗らずに通ふた。車で通ふ環には朝寝も出来るが、篤子は朝の五時に起きなければ髪を結ふ暇もない。篤子に夙く起きられる事は女中共の苦痛である、篤子は火の氣のない火鉢の傍で冷飯を食つてこそこそと家を出て行く。其の度毎に仙七が靴を磨いてやつたり下駄を拭いてやつたりした。

外へ出ると朝風が冷や／＼と顔を吹く。眠から覺めた何の家も／＼活氣に満ちて町々の家根は朝日の光を待て居る。暗い家の中を出て河岸を通ると篤子は毎も氣が晴れ／＼とした、而して背後に従いて來る黒犬を此處で追ひ返す。「待て御居でよ四時に歸つてゐるから、餘り遠くへ行んぢやないよ、直ぐ家へお歸りよ」

黒犬は主人の行方へ凶事でもあるかと危む様に顔を右に左に動かして篤子を見詰める。而して最後に打つ眞似をされて詮方なげに後戻りする。と又た其處に稻荷様の様に座つて遠く／＼篤子の姿の見えずなるまで見送るのである。

學校の規則には一切絹類を着てはならぬと定めてあるが、媒妁學校と綽名される此校の生徒には綿服の者としては極めて僅少であつた。虚飾に強い若い女達は虚飾に強い父母の慈愛に狎へて綺羅びやかに飾る。其間に立つて篤子は紡績飛白に後滅りの下駄、少女心に吾ながら耻かしいと思ふ事もあつた。

妙なもので、身装の好い人々は何となく權力が強くなり而して爾いふ人達が仲好になつて自然と身装の悪い人達を壓倒する、悪い方は一種の反抗心から團體を作つて其れに當る。双方の軋轢は女の事であるから男よりも烈しい。篤子は恚ういふ渦中に立て微かに「世間」といふものを知り初めた。何だつて喧嘩するんだらう、何だつて陰口を言ふんだらう。

けれども女には生れながら美を好む性質がある。紡績飛白を着ても篤子の漆の様な髪鈴を張つた様な涼しい眼、ぼつてりと垂れさうな柔かい頬には誰彼を問はず御人形の様だと言はないものはなかつた。篤子は美しさの爲に双方に可愛がられた。篤子さんくの聲が何時も放課後の門外で高い。一緒に行きませう、其處までね」中には篤子さんの様な妹が欲しいといふものもある。三年生の女達は誰よりも篤子が最肩であつた。彼等は休みの時間に篤子を自分共の控室へ伴れて行って代りく篤子の髪を結てやつたり、手を引いて走せ廻つたりした。

四

同じ級の内に大村富喜子といふのがあつた。醫學博士の娘で毎も白金の鎖を首から長く掛けて居る。篤子より二歳も年長で此の春まで華族女學校に通ふて居たが二度とも落第したので両親が學校を恨んで退學さし、篤子と同級に入れた。彼女は性來赤髪である處から鍔を當て、奇麗に縮らした、鼻が素敵に高く眼が細く、鬚抜けて顔が大きい。其れでも當人は頗る容色自慢で、校中でイの一番に新流行のものを着けるのは彼女であつた。又た絹服黨の旗頭で入學の當時から先生に練名を付けたたり綿服黨を阻害したりしたのも彼女であつた。毎もキヤラメルキャラメルの箱を懐ふところに、教室でももぐぐ口を動かし人々にも分けて與る。自分の命令に従はなないものは種々な流言を放つて讒誣ざんごし廻る。其辯世話燒で人に頼まれた事は何でもしてやるといふ義俠心を有て居る。此女の言ふ事は何人も信する者がなかつた、

けれども此女に従はなければ迫害が恐ろしい處から表には首領の如く奉つて居る。

富喜子の周囲は毎も笑聲が漲きつて居る。新らしい文士の小説の話、ラブの話、スウィートホームの話、芝居の話、若い男の噂、其那事に趣味を持つ者も持たぬ者も、話に釣り込まれて未だ萌し掛けもせぬ幼い不可思議な情緒を唆られた。

富喜子の自慢は音楽で、聲樂は實際勝れて居た。其れと墨を摩するものは篤子である。二人は毎も先生に賞められた。同時に富喜子は競争心を以て充たされた。篤子の聲は自然であつた。淺蟲の海岸で潮風に吹かれながら波に向て唄ひ遊んだ彼女の喉は軟かに滑らかに暖かに美しきサブラノを送り出すのである。富喜子の聲は曲折に富めるアルトである。篤子は只だ真直に立て真直に唄ふが、富喜子は肩を揺かし體を捻り、顔を振り口を曲げ、一舉一動の表情は極めて巧みなものであつた。富喜子を賞める者は重に絹服黨で篤子を賞める者は綿服黨であつた。或

日雨黨が端なく衝突して議論に花が咲いた時、三年級の生徒達が仲裁した。而して聲は篤子の方が勝り曲は富喜子の方が勝るといふ事に評決した。

「篤子さんや何かと一緒に見られては酷いわ」と富喜子は言た。實の處富喜子は學課に於て篤子に劣つて居るが、其れは先生の依怙最負だと信じて居る。縦令學課に負けても音楽だけは……と彼女は其ればかりを矜持にして居た。

「三年級の人は篤子さんばかりに最負をして居るんだ」

唇を噛んで獨り柱に凭れて顔を熱らして居ると其處へ彼女の腰巾着と言はれる坂口延子といふのが御機嫌伺ひにやつて來た。延子は顔の青い營養不良的に首筋が細く長く毎でも涙を浮べてる子である。元と綿服黨であつたが此頃は裏切をして富喜子の手先となつて居る。其れは富喜子から種々な物を貰ふので、其の代りに綿服黨の振をしては種々探偵しなければならんといふ厄介な役目を仰せ付かつて居る。

「どうしたの？」と彼女は恐るゝ言た。

「篤子さんなんか〜」

「だつて貴方は曲が巧いんだから」

「聲だつて私篤子さんには……」

「でもねえ、篤子さんは聲が高い許よ」

「爾ですとも、篤子さんは肺病ですもの」

「えつ？肺病？」

「えい、私の父が篤子さんの家へ診察に行くのよ、皆な肺病の血統だつて、篤子さんの御父様も肺病で死んだのですもの」

「まあ、其れぢや聲が好い筈だわ」

「延子は郵便夫となつて全校に觸れ廻つた。」

「肺病！」

「肺病！」

「篤子さんが肺病！」

「傳染ると恐いわね」

少女達の眼は恐怖に輝やいた。其れとも知らず篤子は放課と共に門の外へ立て友達を待た。

「一緒に行きませう」

寄り添はうとすると逃げる様に去て了ふ、一人！二人！三人！残された篤子は呆氣に取られて茫然と後を見送つた。

家に居ると伯母の冷たい眼に睨まれ、學校へ行くと富喜子等の毒ある口に罵られ、篤子は今まで曾て知らなかつた不安の念に打たれた。けれども彼女には一種の性癖があつた。其れは凡て厭な事に對しては何等の執着を有たない事であつた。悲しい事や腹立たしい事や怨めしい事、其れは一時に眼が眩む程自分を興奮させるが、十分間も経つと全然忘れて了つて楽しい事や明るい事や暖かい心や人に親しみ度い様な心が反對に胸一ぱいになつて来る。今泣いた眼を擦りく伯母の前へ出て笑顔を向ける事もあつた。時にはもう二度び環には口を利くまいと決心する其場で自分が悪くもないのに謝罪して相手を慰める事もあつた。彼女は一分間でも人を憎んだり憎まれたりといふ厭な感情の渦巻に身を置く事が出来ないのである。

「怒つたかと思ふと直ぐ笑つてる、本當の狂人の様だ」とお時は言た。實際篤子は自分の感情を包むといふ事は出来なかつた。悲しければ直ぐ泣く、可笑しければ腹を抱へて笑ふ、天氣の好い時には大きな聲で唄ひ、曇り日には鬱ぎ込んで居る。

「何といふお行儀が悪いんです、女といふものはね、怒つた顔をしたたり轉がつて笑つたりするものぢやありません」

「だつて伯母さん、私自然に爾なるんですもの」

「其れを忍耐するのが女です」

「でも乳母は随分泣蟲で笑ひつばよ」

「其れは田舎者だからです」

東京の人は悲しくても泣かず可笑しくても笑はぬ、其れが行儀といふものであると初めて聞いた篤子は肝を潰した、と或日彼女は例の「一日と一生」を讀だ時慙

ういふ事が書いてあつた。

「喜怒色に表はさずといへるは東洋國の惡教育なり、吾人は吾人の生活に大自然を受容する事に依て生の榮光を知る。感情を束縛するは虚偽の生活なり」

「これが道理だ」と篤子は思つた。縦令此の書を読まぬにしろ篤子は什麼しても自分の感情を抑へる事が出来なかつた。併し彼女の悲しみや笑ひは極めて不秩序なものとなつた、突然何とも知れぬ悲哀が胸を騒がすかと思ふと又た突然何も彼も滑稽に見えて笑ひたくなる。「身體が變つて來たんだらう」と總五郎がお時に注意した。

「爾かも知れませんが」とお時は笑つて。「御氣を付けなさいよ、孫が年頃になるのに貴方も可い加減になさらんと……」

「孫々と言はれるなよ、氣が怯けて仕様がなない」

此の問答は篤子の眼前で起つた、が篤子には一向何の事だか解らなかつた。併し

し自分の事は扱置いて篤子は環が段々容子や聲が變つて來たのに驚いた。何處となく子供臭い點が無くなつて、身體がむつちりと肉付き初め睡の色が深い光を湛へて來た。或日二人は風呂に入つて流しつこをした。

「まあ貴方のお乳は？」と篤子は驚歎した。「随分大きいわね」

「貴方も大きいわよ、尖の方が紅くなつて」

「爾？」と篤子は初めて自分の乳が軟らかに膨らんで居るのに氣が付いた。

「どうしたんでせう、不思議だわね」

「大人になるのよ」

「男には什麼してお乳が無いんでせう」

「あるけれども小さいだけよ、女は赤ん坊に乳をやるから大きいのよ」

「貴方が赤ん坊を生むの？」

「いやだわ、貴方は？」

「ひよつとかしたら生むかも知れなくつてよ」
二人は互に乳を見合つて笑つた。笑の中には無邪氣な純潔な而して是れからち行く生の力が仄めいて居た。

六

篤子の眼には段々幸福が開けて来る様に思はれた、縦令家庭が冷たくとも學校で窘められても篤子は何者かに暖められ引立てられるかの如く漸々女らしい女になつた。丁度其れは福壽草や雪割菜が冷たい重たい雪に鎖されながらも地息の力で自然と美しい芽を吹き出す如く。

或日何かの事で伯母は恚う言た。

「もうお前も子供でないからお行儀位は叱言を言はれないやうにしなければね」
篤子は伯母に叱られた恐怖の中にも微かに喜悦を感じた。子供でない！本當に爾かしら、もう大人になつたのかしら。彼女は恚う考がへて心の底に一種の強味を覺えた。

或時總五郎初め一同が珍らしく打揃ふて夕飯の膳に向つた。と、突然總五郎は

お時に慙う言つた。

「あの子供は何時来るんだ」

「もう直ぎです、卒業が済むと高等学校の試験を受けに来るさうで」

「ふうむ、其れでお前は世話を焼く積か」

「まあ爾でもしなければね」

「其れが出来るかね」

「出来なくなつて仕方がありません、御父様が爾してくれと言ふんだから」

「力さんの事ですか」と琢磨が口を挟めた。

「爾だ」と總五郎は煮え切らぬ様に言て、「お前は自分の子や篤子だけでも持餘してゐるんぢやないか」

「でも」とお時は逆らう様に言た。

「貴方に御迷惑は掛けません」

噂の主の力といふのはお時の良人の兄の子である。良人の兄弟五人あつたのが段々に死で今では福永家に残るのは今年十九歳の孫息子と六十を過ぎた父親と二人だけとなつた。父親は岡山縣でも屈指の素封家で今だに郡長を務めて居るが、六十を過ぎても元氣が衰へぬ。今度孫の力を上京させるから何分頼むとの手紙が来た。

「力さんが来ると賑かで可いわね」と環は喜んだ。

子供三人が膳を離れて環の室に集まつた時篤子は慙う訊ねた。

「力さんで什麼な人？」

「其りや好い人よ、唄が巧くつて字が巧くつて何でも出来るわ、随分巫山戯る人よ、ねえ兄さん」

「昔は爾だつたが今では什麼なつたかね」と琢磨は不快さうに言た。慙那話に時を費して篤子は再び元の室へ歸つた時、御祖父さんと伯母さんは例に依て何か知

らん争そつて居た。

「兎に角ね、お前は子供を教育する資格がないよ」

「どうして其那事を仰やるんです」

「お前の子供を御覽、満足な奴は一人もない、猫可愛がりにも可愛がつたかと思ふと自分の蟲の居處で罪もないのに怒鳴り付ける、あれちや子供だつて面喰つて了はあ」

「何を仕様と私の子ちやありませんか」

「其りや爾うだ、お前の子だから可いとしてだね。其れちや篤子や力は什麼なる、篤子は女だから黙つてるが力は爾は不可よ、男だせ、お前よりも學問が出来るぞ、其れに死んだ亭主の兄の子ぞ、お前は依怙最良が強しから……」

「依怙最良ですつて？私は何時依怙最良を私は何を……」

「まあ可、く」と總五郎は喘息でちい／＼喉を苦しがりながら煙草入を取上げ

た。

「可くはありません」とお時が言ふ。

「私が篤子に何かしたと仰やるんですか」

「さあ什麼だかね」

「何を立聞してるんです」とお時は呆氣に取られて途惑ひしてる篤子に聲を掛け

た。
「そうれ其の通りだ」と總五郎は笑つて「篤子早く逃げろ伯母さんが恐いよ」

二三日過ぎて噂の主の力が上京した。短い袴、紺飛白の袴、東京の書生と異つた處もないが、袴の横に手拭をぶら下げて居た事だけは異様に見えた。お時が下へも置かすにちやほやする。氣に入る様な田舎の事に關する質問を提出する。其度毎に力は怯びれた風もなく流暢に答へた。

「年は琢磨より二つ多いけれども中々二つ處でない、餘程確乎者だ」とお時は言た。準備して置いた室は二階の一室で、琢磨と隣り合つて居る。環も琢磨も篤子も直ぎ此の珍客の友達になつた。只だ琢磨に取て困るのは力が來た爲に柔道の自慢話だけは差控へねばならぬ事であつた。力は何でも知て居る。柔道もやれば鞞もやる、野球では田舎の中學の選手で、晝も描けば音楽も上手である。大變な奴が來たと琢磨は驚いた。

夕方篤子は自分の室の椽に腰を掛けながら足の先で黒犬の背中を弄つて居ると琢磨が入つて來た。

「琢磨さん可いわね今晚から賑かだわ」

「力さんが來たから？」

「えい、何でも出來る様だわね」

「うむ：併し彼奴は法螺吹だよ屹度」

「爾ちやないわ：其れにお話しが巧いわ」

「あゝ口が中々達者だよ」

「大變に強いですつてね」

「どうだか知れやしない、其中一返僕の腰投を食はして見なけりや」

「喧嘩をしちや厭よ」

琢磨は霎時黙つて。「君は力さんが好かい」

「えい好だわ」

「何故好だ」

「だつて……たい好なんですもの」

「爾かな、僕は厭だ」

「何故」

「彼奴傲慢だよ」

「爾ぢやないわよ、好い人よ屹度」

篤子が賞めれば賞める程琢磨は不快さうな顔をした。

「今何處に居るの？」

「環さんの室で話をしてるよ」

「行て見ませうよ」

「止せよ」と琢磨は篤子の手を引いて並んで腰を掛けた。「君は力さんの處へ行き

たいの？」

「えい」

「行ても詰らないぢやないか、僕と話をしやう」

「だつて貴方との話は何にもないんだもの」

「君はね」と琢磨は慌てた様な聲を出した。「君は僕が嫌ひなの？」

「好だわ」と篤子は平氣に答へた。

「力さんも好なの？」

「えい」

「其れぢや詰らないや」

二人の言葉は途絶れた。琢磨は黙つて篤子の身體に寄つて來た。庭は段々に暮れて若楓が風に動く度に石燈籠が臙に出沒する。黒犬は黙つて足元に眠つて居る。是が丁度逢魔が時。凡て物の音といふ音が全く絶えて只だ琢磨の呼吸が耳近く聞

ゆる。

「彼方へ行きませう」と篤子は不意に起た。

「まあお待ち」

「だつて恐いんですもの」

「何が」

「何だか知らないけれども……もう暗くなつたわよ」

篤子は逃げる様に室を出た。琢磨はのそり／＼後に従いて来る。茶の室へ出ると花やかな電燈の光の中を女中共が賑やかに出入りして居る。

「何が恐かつたらう」と篤子は一分前の心持を不思議に思つた。

八

篤子は既う子供でなくなつた。彼女の身體は自然に發達した、而して學校に於ける富喜子一派の戀愛談や家庭に於ける女中共の無駄話、お時の素振、環の仍な男の品評、其等が今まで自分とは遙に縁遠い別天地の出來事の如く思つて居たものが、次第に自分と接近して來る様な氣がした。少なくとも彼女は他の人達を了解する事が出來た。

十日と経たない中に琢磨と力は犬と猿の如く仲が悪くなつた。「あんな下劣な奴はない」と力が言ふ。「あんな傲慢な奴はない」と琢磨が言ふ、二人は交る／＼篤子の前で敵を罵つた。腕力と議論では琢磨は逆も力に敵はない、琢磨はお時に事情を訴へた。

「あゝいふ奴と一緒に居るのは厭だから逐出してやつて下さい」

けれどもお時は頭を掉た。

「もう少しと辛抱なさい」

慙ういふ時に總五郎は何時でも横槍を入れる。「力を寄宿さしては什麼だ」

「其りや不可せん、私が頼まれたんですから」

總五郎はにやりとして横を向き。

「お前は力をものにしやうと思つてゐるね」

「何ですつて？」

「解つてるよ、環と夫婦にしやうといふんだらう」

「何だつて其那事を仰やるんです」

とお時は顔を眞赤に染めた。

「力には父親の財産があるからね、親父だつてもう直きお目出たくなるんだ、爾うすると……」

お時はふいと外へ出た。「養親父！何でも感付くんだから始末が悪い」

同じく他家へ寄食の身、力と篤子とは眞の兄妹の如く仲好くなつた。篤子がお時に叱られた後で力は必ず篤子の室へ来て篤子を慰める。慰められると堪らなく悲しくなつて篤子は力の胸に身體を擦り付けて歎息するのであつた。慙ういふ涙は今までに覚えぬ事であつた。仙七と語り合ふ時も泣きたくなる事は屢々であつたが、併し仙七に對しては只だ果敢ない運命を抱いた二人の子供が手を取つて泣いてるだけに過ぎなかつた。力に對するのは其れとは異つて居る。何處かに力強い、頼母しい處があつて、假令は自分の兄にでも對する様な心持であつた。

「窘められたつて構はないよ、僕が付いてるから大丈夫だ」と力は熱氣に慄へる手を以て毎も篤子を抱きしめてやつた。爾いふ光景を見るが最期、琢磨は夢中になつて力を罵る、環は唇を反らして直ぐにお時に告付ける。周囲の壓迫が強ければ強い程、力と篤子は益々親密の度を進めた。

篤子は十七になつた。來年には卒業する、爾なつたら乳母にも會へるだらう。彼女が始終仙七と其れを語つた。仙七は朝は早くから店に通ひ夜になつて歸つて來る。歸つても彼は碌々篤子の側に寄る事も出来なかつた。

爾いふ時に篤子の一番頼りに思ふのは力である。什麼な難かしい數學でも、英語でも、國文でも力は丁寧に嘯むで啣める様に教へてくれる。什麼しても覺えきれない時には篤子は自分で苛れつたがつて泣き出す。其の顔を力は毎も微笑を以て眺めるのであつた。而して根氣能く時間を惜まずに教へてくれる。氣の毒になつて篤子は解らぬながらも解つた振をする事もあつた。時には机に並んでひつた

り顔と顔とが寄り添ふ事もある、篤子の鬢がほつれて力の頬に頬さく絡むと力は鉛筆で其れを掻き上げてやる事もある。力が籐椅子に腰を掛けて本を讀んでるにも拘はらず篤子は無難作に力の膝に腰を下して故意と妨害をする事もある。「お轉婆だね君は」と力は妹に對する様に呆れて笑ふのであつた。

上野の櫻の噂が新聞に出る頃になると南家の庭も一度に春めき渡つて來る。柳が日に透く様な青い芽を揃へて先づ塀の周圍を彩ると櫻は堪へ兼ねた様に南の上枝から綻び初める。其處は母家を離れた裏庭で、腰掛の代りに力は石油箱を二つ置いて戸板を載せ莫産を敷いて涼み臺の様なものを作つた。充滿に枝を擡げた枝垂櫻の傘の中に身をもぐらして軟かい春の光に頬を熱らしながら篤子と力は夢の様

様に楽しく語つた。
「私はね」と篤子はしみじみと言つた。「私ね、貴方の様な兄さんが欲しいわ」
「兄さんが？」と力は同じく軟らかい心持になつて。「君には兄さんがあつたやな

いか、文太郎とか言たね」

「あゝ、あるわ、あるけれども一緒に居られないんですもの」

「可愛さうだな」と力は呟く様に言た。彼は時々「可愛さうだな」と言ふ。言はれる度に篤子は嬉しい様な悲しい様な氣になつて自然と涙ぐまれるのであつた。

「兄さんになつて頂戴ね」と篤子は自分の手と力の手を平たく重ねて其れを動かしながら言た。

「其りや兄妹になるとも」力が答へた。

「なつて下すつて？」

「あゝ、だけれどもね、君は誰かのお嫁さんになるんだらう」

「誰の？」

「誰だか知らないが、僕の聞いた處では君は琢さんの御嫁になるんださうだね」

「知らないわ」と篤子は耳根を染めたが聽てしくしく泣き出した。「可いわく可

いわ、あんまりだわ力さん、可いわくく」

「怒つたの？」

「知らない」と肩を揺ぶる。

「ちや喜んでるの？」

「知らない」

「ちや本當なんだね、爾だ、琢さんのお嫁さんになるんだ」

「誰が爾那事を言て？」

「誰も言やしないけれども僕の想像さ」

「酷いわ」と鋭く言て兩手に顔を掩ふた。

「僕も酷いと思つたよ、僕には打明けてくれないんだもの」

「だつてく其那事、貴方が獨りで考へて獨りで決めてるんですもの、可いわ、知らないわ、酷いわ」

「可いわ、知らないわ、酷いわ」と力も口真似をして「謝罪まつた、御免、謝罪まつた」と肩越しに篤子の両手を開いて顔を覗かうとする。

「知らないく」

「謝罪るから、御免く」

猶も寄るを猶ほも拗ねて身を避ける途端、鋭い聲が二人の耳に響いた。

「何をしてるの？」

環の姿が櫻の蔭にちらと見えた。

「あら可いわく私言告げるわ」

二

「環さん」と力は呼止めたが間に合はない、環は既に垣根の角を曲つた。

「馬鹿だな、仕様のない奴だ」と力は手に持った本を椽臺に叩き付けた。

「什麼したんでせう」

「なあに何でも無いさ」と力は一言に打消して。「篤さんが僕を困らすもんだから」と笑ふ。

「だつて貴方が悪いんだもの」

「何が悪いです」

「私を琢さんの御嫁になれなんて言ふもんだから」

「だつて琢さんが貴方をお嫁に欲しがつてるから仕様がなない」

「欲しがつたつてなりやしなないわ」

「其れぢや什麼するの？」

「私何處へも行きやしないから」

篤子は何といふ事なしにむか／＼と腹が立て來た。泳へやうとしても涙がぼろ／＼零れる。左りとて其那に根柢のある腹立だしさでない事は自分も知つて居る、知つて居ながら仍且腹が立つ。

「妙だな、何が其那に口惜しいんだらう」

「口惜しいから口惜しいわ」

「どうして口惜しいから口惜しいの？」

「知らない」と篤子は肩を揺つた。と今度は急に可笑しくなつた。堰き止めた水の堤が一度に崩れ出した様、彼女は今まで怒つた面をして居た手前に對しても什麼かして笑を泳へやうと努めた。が其れも及ばなかつた。唇が弾機で擴げられる様に自然と弛んで來ると、矢も楯も堪らない、思はずクス／＼と聲を出した。

「お、笑つてるね」

「だつて口惜しいんですもの」

「口惜しくつて笑ふ奴があるもんか」

「だつて……」

「口惜しいか、ハ、ハ、口惜しくつて笑ふ人を僕は初めて見た」

機嫌ががらりと直つて二人は再び並んで腰を下した。而して以前よりもつと親しい心持になつて篤子は乳母の事文公の事虎公の事などを物語つた。此物語は力は幾十返となく聞いた、けれども語るは同じ物語でも篤子の眞面目な熱心な口物は毎でも思はず同情の歎息を發せずには居られなかつた。海を抱いた田舎の村で三人が餘念なく遊んで居る光景が歴然と見えた。

「僕に若し金があつたら爾いふ人達を助けてやるんだ」

彼は又た慫うも言た。「何だつて乳母の處へ行かないんです」

「行ちや不可いと伯母さんが言ふし、乳母からも手紙で来ては不可ないと云てよこしたんですもの」

「不法な話だ、其那事はありやしない、僕が代りに訪ねて行てやらう」

「だつて爾すると伯母さんに叱られるわ」

「憎まれると損だからね、其れも爾だな」

篤子には力が涙を浮べて自分に同情してくれるのが何より嬉しかった。偶には氣の毒になつて話を中止する事もあつた。實際力は泣蟲であつた。少し悲しい話でもすると男の癖にぼろ／＼涙を零す。癪に障る事があると拳骨を固めて其處ら山を叩き廻る。彼は堪へ性のない質である。此の性質は篤子に似て居る。けれども篤子は直ぐ顔に露はすと共に直ぐに自分を制へる力があつた。

「まあ篤子お前は……」

突然二人の前へ現はれた二人！一人はお時で一人は環であつた。

「お前達は何をして居たの？」

「何もして居ません、話をして居ました」と力は佛然として答へた。

「力さん、貴方に聞くのぢやありませんよ、篤子に聞くんです」とお時は力に優しい顔を向けて直ぐ篤子に恐い一瞥を閃めかした。

「遊ぶ事ばかりに身が入て感心ですね、力さんの勉強の邪魔をしては不可いとあれだけ言て聞かしたのに解りませんか」

「いや決して僕の邪魔にはなりません、今も學校の話をして居たんですから」

「嘘だのふ」と環は叫んだ。「學校の話ぢやないわよ、お嫁さんの話だわ、身體を引付けて可厭らしい行爲をしたりなんかするのは學校の事なの？」

「何を言ふんです、失敬な」と力は突如環の胸倉を捉へた。「もう一返言て見ろい」

「言ひますとも、何返だつて言ふわ、貴方は今ま篤子さんと……」
「よろしい」

力の拳骨が環の頭の上に閃めくと同時に篤子は確乎と其腕に縋つた。
「お止しなさい」と彼女は聲を限りに叫んだ。

「此那く嘘を吐く人を撲つたつて仕様がないわ」

力は思ひ返した様に拳を低れて黙つた。

「嘘ですつて？嘘ぢやないわ」と環は猶ほも虚勢を張つた。「さあ打つなら打つて御覽なさい、打つて御覽なさい、篤子さんは何故御抑めなすつたの？其ら打たうたつて打てないでせう、御自分達が氣が咎めるもんだから」
「未だ何か言ふのか」と力は再び詰め寄つた。

「言ひますとも、貴方方が猥らな事をして居たんだから」

「猥らな事つて何あに？」と篤子は沈んだ聲で言つた。

「貴方の胸に聞いたら解るでせう、二人で巫山戯て居た癖に」

「巫山戯るのが猥らな事なの？其那事はありません、巫山戯もすれば話もしますわ、えい、私悪い事だとは思ひませんわ」

「何を言ふんです、篤子！」とお時は窘める様に言つた。「お前が悪いんです、其那馬鹿な事をして悪いと思はないなんてお前が其那風だから力さんまで迷惑をします、お氣を付けなさい」

「私に悪い事がないんですもの」

「何ですつて？もう一返言て御覽」

「私に悪い事はありません」篤子は明晰と答へた。彼女の胸には何の恥る處もなければ又た何の恐るゝ處もなかつた。

「悪くないといふの？」

「えい、私何が悪いんでせう」

伯母に言葉を返したのは是が生れてから初めていあつた。彼女は環や伯母が何故此那に眼の色を變へて大騒きをするだらうといふ疑問の中にも淺間しい紛争や卑しい言葉を濫發して居る伯母母子の心術に對して多少輕蔑の念が湧きかけて來た。而して何時の間にか猥らな渦卷の中に自分までが巻き込まれたのに氣が付いて烈しく顔を赧らめた。

「悪くないと言ふんですね、確に爾です、確に爾です、お前が力さんの勉強の邪魔をして巫山戯て居ても悪くないといふんですね」

お時は念を押す様に問ひつめた。

「えい、悪くありません」

篤子は飽くまでも大膽に冷やかに答へる。

「ふうん」とお時は笑つた。「悪くなければ悪くないで可うございます、悪いといふ事が解るまで今日から力さんの室へ行く事を許しません」

「何故ですか」と力は詰る様に言た。お時は其れに答へやうともせずと言續ける。「學校へ行って校長にも能く言てやります、どうせ私の言ふ事なんか聞きませんから、さあ室へ御歸りなさい、何を愚圖くしてゐるんです」

「伯母さん其りや餘り酷い」と力は額に汗を掻いて怒鳴た。「篤さんに何の罪があるんですか、篤さんが悪ければ僕も悪い、同罪です、篤さんを罰するなら僕を罰して下さい、僕は寄宿をします、此の家には居ません」

「貴方には悪い事がないんですから……さあ篤子！未だ其處に立て何をしてるの？」

篤子は力と環が何か言争ふ聲を後にして黙つて室へ歸つた。其處へ仙七がひよこりと顔を出した。

「御嬢様！」

「どうして来たの？」

「一寸お店からの用事で参りましたがね、謝罪の方が可いや、ねえ御嬢様、憎まれると損ですせ」

「私に悪い事がないんだから謝罪りやしないわ」

「でも其れぢや損ですせ」

「損でも私謝罪らないわ」

「御嬢様は強いな」と仙七は嘆息して、纏て襦衣の衣匣から一通の手紙を出した。

四

手紙は文太郎から仙七に宛てたものであつた。彼は中學校を中途で廢學し、今は近所の華族邸に備はれて植木や養蜂の手傳をし僅の賃錢で母を養ひ、傍文部省の檢定試験準備をして居る。商賣の養鶏も母が眼を病つてるので思はしく行かない、其に母の眼病は餘程養生を要するので、滋養物を食べて世帯の苦勞などは一切せぬ様にしなければならぬと醫者が言てるから田舎へ歸らうと勸めるけれども、御嬢様が御嫁になるまでは東京を離れたくないと云ふ。其中段々眼病が進むと困るから出来る事なら一度で可いからお嬢様を連れて来て母に見せてやつてくれまいか、別れてから六年にもなるが、母が嚴しいので會ひに行く事も出来ず、薄情だと怨んで居られるだらうが自分だつて一日も君や御嬢様の事を忘れた事はない、母も見たらうが僕は其れよりも猶ほ見たい、何とかして御連れ申す方法

がなからうか。併し其爲に若し御嬢様に難儀な事でも出来る様だつたら今ま強ひて禍を招ぐのは止めて貰ひたい。

細々な文章は辭句の端麗に伴ふて堪へ難き情緒が春蠶の糸を吐くが如く涙も籠れば血も湧き立つ。大人振た筆致、事を解けた論理！どんなにか世間の苦勞をしたであらう、恚ういふ注意深し考へは力さんでも及びさうもないと篤子は乳母の眼病、文太郎の貧苦を察して讀み行く中に涙を手紙の上に出した。

「氣の毒ですなあ」と仙七も眼を瞬たいた。

「會ひたいわ私、乳母に會ひたいわ」

「其りや爾でせうとも」

「連れて行て頂戴ね」

「えい参りませう」と仙七は思ひ決めた様に言て。「併し奥様には秘密でね」

「秘密は不可いわ、伯母さんに爾言ひませう」

「言ちや駄目ですせ」

「でも言はなけりや悪いわ、伯母さんだつて屹度許して下さるわ、乳母が病氣なんだから」

「さあ什麼ですかな」と仙七は頭を掉た。

「仙七！仙七！」と呼ぶ聲が聞える。

「そら奥様だ」と仙七は舌をべろりと出して首を縮め奥庭指して忍び足に引込んだ。とお時の姿が現はれた。

「何をしてるんです」と先づ一喝して。「先刻彼れだけ不始末をして叱られたから、謹慎をしてるかと思つたら何といふ状でせう、今まで此に居たのは仙七でせう」

「えい」

「二人で私の蔭口でも言てたの？」

「いゝえ伯母さん。手紙を……」
篤子は思はず口を滑らした。

「手紙つて何です」

お時は敏くも篤子の懐から食み出してる手紙に眼を着け。片手を伸ばして其れを引き出し何やらぶつ／＼言ひながら読み通した。

「伯母さん遣つて頂戴ね」と篤子は怖々して。

「ねえ伯母さん」

お時は黙つて手紙を巻き收め霎時篤子の顔を見詰めて居たが、急に笑顔を作つて優しい聲で言た。「乳母の處へ行きたいの？」

「えい」

「本當に行きたいの？」

「えい」

「爾だらうね、母親同様なんだからね、其れちや行て御出」

「やつて下さるの伯母さん」と篤子は吾を忘れて躍り上つた。餘りの嬉しさに彼女は兩頬を紅く染めて其眼は美しく輝いた。

「えい、行ても可いとも」

「本當？」と摺寄てお時の帯に手を懸ける。

「本當とも」とお時は仍且笑つて。

「だがお前が私の訊く事に答へさへすれば」

「どんな事？」

「お前と力さんの事です」屹と言て讀む様に顔を凝と見る。

「力さんと什麼な事？」

「何か約束した事があるんでせう」

「ありますわ」と平氣で言ふ。

「あるでせう」と息を喘ぎます。

「えい、学校の圖畫の下書を描いて貰ふ約束をしましたの？」

「其那事ではありません」

「あ、其れちや端艇の切符の事？」

「篤子私冗談を言てるんぢやありませんよ」

語氣が鋭いので篤子は稍々心配になつて來た。

「なあに？伯母さん」

「お前はね、力さんと夫婦約束をしたのぢやないの？」

篤子はガ、と耳が鳴る様な氣持がした。而して吾ながら顔が熱つて來るのを感じた。

「そ、そ、そんな事はありませんわ」

「明晰御言ひなさい」

「私知りませんわ、そんな事」

「言はないんですか」

「知らないんですもの」

「どうしても言はないの？」

篤子は何が何やら解らずに只だ茫乎として黙つた。

「もう可いよ、訊かない、其那隠し立てをするなら私も知らない、乳母の處へ行
く事もありません」

「伯母さんー」

篤子は呼んだがお時は振向もせず室を出て了つた。

篤子は伯母さんが什麼して此那に自分に辛く當るのか、今まで考へて見た事もなかつた、環を可愛がつて自分を疎んずる事は毎日の様に起る出来事であるが、其れとても環は親身で自分は他人だから無理のない事だと思ひこそすれ、根抵から伯母を怨む氣にはなれなかつた。彼女は毎日學校へ通はして貰つたり、毎月一圓の御小遣を貰ふ事を此上もないお時の親切だと思つて居た。

けれども今は俄に彼女の頭を動搖させたものがある。「伯母さんは何故痕迹もない冤罪を私に被せやうとなさるんだらう」

此の疑ひは突忽として夏雲の如く彼女の眼前に奇峰を築いた。生れてから初めての不安恐怖、遺瀾のない悲哀が續々として迫り来る。而して自分にも果して毫も罪が無いか什麼かと胸に問ふて見て、何の疚しい處が無いと確かめて見る。確

かめて安心する、安心はするもの、其れは濁り水の上汁の様なもので、上面だけは安心しても底に何物か遺つて居る。遺つて居るものは何であるか。

「お前は力さんと何か約束したのぢやないか」と言たお時の聲である。無論何にも約束はしない、併し篤子の胸は怪しくも波を打て居る。

「夫婦なんて其那事……」

不圖獨りで言滑らして凝と壁を見詰める。種々な妄想が果しもなく擴がり出す。獨り坐つて遠く電車の響きや町の音や勝手の音を聞くともなしに聞いて居ると、彼女は凡ての人類を離れて孤島に残された人の様に急に淋しくなつた。「明日からは力さんにも會へない」

親しい人は何時でも遠ざかつて行く。父は死ぬ、母は何だか解らず、乳母にも別れ、文公にも虎公にも別れ、仙七は碌々話す事も出来ず、漸く力といふ杖柱が出来たかと思ふと冤の罪で仲を割かれる。「私には頼りになる人が出来ないので」

憊う思ふともう胸が充満になつて自らなる歎歎が始まる。四隣静な室の中！自分の歎歎を自分で聞くと、猶更心細い氣が轟々と募り来る。

彼女は泣き／＼床を敷き展べた。而して兎狗の様に跼踏まつて寝て見たが涙が止度もなく流れて眠れない。彼女は机の抽出から寫眞を出して寝ながらに其れを睥めた。悲しい時には何時でも寫眞を眺めるのが彼女の癖である。

寫眞は乳母と文公と虎公と自分！今から考へると随分田舎臭い變な身装である。虎公は棒切を持って居る、文公は本を持って居る、自分は人形を抱て居る。乳母は尻尾を垂れて笑つて居る。怒つた様に威張てる虎公の顔は頗る滑稽で篤子は見る度に笑つた。けれども今は可笑しくもなければ楽しくもない。「何故皆んな四散になつたんだらう、此の中誰か一人でも傍に居てくれれば可いのに」

彼女は急に淺蟲へ歸りたくなつた。眼病の乳母を訪ねて見たくなつた、其れも出来ぬ是も出来ぬ。彼女は寫眞を頬に接けて泣き續けた。泣くといふ事は彼女の

慰安であつた。

外は臙に星もなく、どんよりと月が暈に包まれて居る。塀の上に猫が三匹いのみ合つて奇妙な聲を出して居たが、どたんばたん落ちる音と共に後は静に庭木を吹く風もない。電車は既に音が無い、火の番の柝木が遠く／＼石を打つ様に聞える。篤子は電燈を消すのを忘れて其儘泣疲びれて眠つて了つた。

一しきり鼠が天井を騒がした。篤子はそれもしらない。と此時塀を乗り越して植込の闇紛れに雨戸／＼を窺がつた曲者がある、彼は逃げる様に風呂場の方に去つた。と思ふ間もなく廊下傳ひ、手荒く襖を開けて篤子の室に入った。電燈の光がさつと黒い布に包んだ顔を照らした、汚れた縞の筒袖を尻端折にした太腿から鼠色の猿股が覗かれる、足は泥だらけである。泥だらけの足を容赦なく畳に踏み込んだ。忍びやかといふ様子も見えない、只だ大膽に室へ入たが、此時彼は美しく熟睡して若い女の寝姿が眼に入った。彼は意外の如く立止まつた、而して凝と篤子

の顔に見入た。と彼は聽て靜に膝頭で這ひ寄た。兩手を突いたまゝ首を伸ばして又もや見詰める。涙は乾いたが顰めた眉は愁を語るかの様、黒い髪は解けて枕から疊へ冷たく零れてるので生際から首筋まで鮮やかに照らされて居る。曲者は益摺寄た、而して一度二度首を傾げたが、突然寫眞を取上げて一目見るや否や叫んだ。

「お嬢ちやん！」

篤子は仍且眠つて居る。

「お嬢ちやん！」

篤子が眼を覺ますと曲者が頬冠を脱ると同時であつた。篤子はふいと頭を上げて「呀ッ」と叫ばうにも聲が出なかつた。彼女は跳起きて夜具の上に坐つた。

「あゝ爾だ、お嬢ちやん、私ですよ、虎吉ですよ」

「虎吉？」

篤子は瞳を定めて曲者を見詰めたが聽て吃驚して聲を出した。「あゝ虎公！」
曲者は虎公であつた。七年間片時も忘れなかつた友の虎公であつた。

六年前に淺蟲を飛出して行方知れなかつた虎吉は什麼して此處へ來たのであらうか。

強い者になりたい、豪い者になりたい。東京へ出て修行をしたい。彼の幼い空想は前後の考へもなく彼を停車場に引返さした。彼は構内へ紛れ込んで丁度脚が地を潜る様に何處といふ見解もなしに車室に飛込み、其儘便所の中に隠れて呼吸を殺して居た。汽車が驛に留まると室から室へと逃廻つて巧に改札の難を逃れたが、其中に段々疲れて何時の間にかぐつすり眠つて了つた。眼が覺めると最早や夜中である、彼は薄暗い石油燈の光に夢の如く並んで居る乗客の顔を睥めた。單調な汽車の響が何時までも続く。窓の外は暗で折々火の粉が飛んで行く。彼は心細くなつた。同時に空腹さが一時に迫つて來た。人の食べてる辨當の匂、蜜柑の

色、菓子の袋、其等を見るところ堪らなく悲しくなる。彼は室を出て二等室の入口から硝子越に中を覗いた。何といふものかは知らないが柔かさうな敷物の上に立派な靴や行李を置いて、足も伸びやかに寝てる人もあれば、前曲みになつて林檎の皮を剥いてる人もあり、奇麗な頭をした婦人が夜の更くるも知らぬ顔に若い男と寄り添ふて話してるのもある。三等室とは異つて此室は全然人種が別でもあるかの様、戸の隙から暖かい氣が咬る様に漏れて來る。

「省んな暖かで腹が充満さうだ」

彼は堪へきれなくなつてしくく泣き出した。而して空腹い腹を抱へて鐵棒に攫まつた。

「此奴は堪らねえ、おいボーイ、スチームが熱過ぎるぞ」

恚う言つて扉を明けた一人の紳士がある。臘虎の帽子に臘虎の頸巻をして、酒臭い息がふうんと虎吉の鼻に觸れた。

「やあボーイちやなかつたか……あゝ涼しい風だ」

虎吉は黙つて兩手で涙を拭いた。

「小僧何を泣くんだ」

大きな暖かい手が虎吉の頭に掛ると虎吉の身體が螺旋を廻す様にぐるりと前を向かせられた。

「俺あ泣かねえだ」と虎公は答へた。

「爾か、男の癖に泣くもんちやねえ……お前は一人か」

「うむ」

「一人？はあなある程、幾歳だ」

「十三だよ」

「十三！ほう、十三で……ほう何處へ行くんだ」

「東京さ行くだよ」

「東京か、ほう、一人で、なある程な、豪い、親類とか親とかの家へ行くんだね」

「其那ものはありやしねえ」

「無い？頼る處が無い？で什麼するんだ」

「俺あにも解んねえだ」

「はあ、なある……ほう、豪氣だぞ、強いぞ、豪いぞ、だが何故泣いたんだ」

「腹が空つてるんだい、泣きやしないけれども涙が出たんだい」

「ハ、ハ、」と紳士は頗る恐悦がつて。

「爾か、其は什麼も失禮をした。おい腹が空つてるなら好いものを與らう、お錢もないのか」

「無いや」

「可しくさあ來い」

紳士は先に立て虎公を室内に入れた、而して木通蔓細工の籠の中から、出すわ出すわ宿屋の辨當、サンドウキツチ、佃煮、鳳梨、支那蜜柑に林檎！

「小僧皆な食へ」

「皆な食つても可いかね」

「可いとも」

虎公は鼻息を荒くして頭も上げずに食ひ始めた。

「小僧、少しは茶も飲むんだぞ」

紳士はげら／＼笑つてちびり／＼火酒を飲んで居る。「腹が充満になつたら寝るんだぞ、切符を失くしちや不可えぞ」

「切符は無え」と虎公は辨當を平げて、珍らしさうにサンドウキツチを攫みながら言た。

「切符が無え？落したか」

「うゝん」と頭を掉る。彼は此時急に自分の罪を思ひ出したので、顔を真紅に染めた。

「はあ、なある程、ほう、いかにも、可しく安心しろ、俺が可い様にしてやる」

紳士が言ひ訖つて注意深さうに虎吉の顔を覗めた。

丁度布袋様の膝に居眠る唐兒の様に虎吉は紳士の傍に柔らかない膝掛に包まれて眠つた。汽車は屋根に雪を載せたまゝ上野へ着いた、と見ると昨日の淺蟲に引替へて此處は別天地、春の光が眩ぐるしい程混雑した巷に溢れて居た。車室を出る時紳士は自分の帽子から青い切符を出してくれた。

「小僧ッこれを持って出ろ」

「お前様のは？」と虎吉が氣の毒さうに訊いた。

「ハ、俺にはお金といふものがあるよ」恚う言て紳士は直ぐ「してお前は何か何處へ落着く當も無えのか」

「あゝ」

「ぢや什麼する積だ」

「伴れて行て呉せ」

「うん」と紳士は首肯いた。「停車場を出て右の方へ行くと山がある、山を上ると西郷さんの銅像があるから其處で待てる」

改札口で紳士が見えなくなつた。虎吉は無事に停車場を出て殺へられた通の處へ行た。噂にも聞き繪葉書にも見た西郷様の銅像！其れをつゝと見つめてる中に自分は本當に東京へ來たのだといふ氣がして來た。何の人を見ても自分より利巧さうで言葉が軽やかに面白さうである。彼は什麼かして此の銅像の下で篤子や文公と三人で遊びたいと思つた。其中にも例の紳士の事を折り／＼考へた。來てくれるだらうか、來なかつたら什麼しやう、お錢は和尚様から貰つた二錢だけ、其れで何處かへ宿れるだらうか、宿賃といふのは幾何位だらうか。恚う考へると腹の底に潜んで居た心細さがむら／＼と頭を擡げる。彼は急に大變な事でも思ひ出した様に四邊を見廻した。

「什麼した小僧ッ」

振返ると例の紳士が莞爾くして立て居る。汽車の中で見たよりもすつと晴やかで、色は黒いが磨ぎ立てた赤銅の様に光澤があつて、大きな鼻、平つたい額、圓い眼、太い眉、人並より高い身丈、何處から見ても男らしい岩疊な骨格である。其れに添ふて新に六十を過ぎた位の老人が立て居る。眼がしよぼくくと皺の中に隠れさう、頬の皮が弛んでばくくくと口を動かすと骨張つた喉の皮まで動く。獵帽の下から白い髪が漏れて、不絶鼻をクンクン鳴らす。

「此の小僧だよ、爾だ虎吉とか言たな」

「あゝ」

「虎吉を伴つて行てくれ、可いか、俺が歸るまで其儘にして置いて可いぞ、飯を食はして置け、退屈だつたら活動へでも伴れて行け」

紳士が言ふ度に老人は只だ首肯だけで返事もしなかつた。別れ際にたつた一

言！

「で、親方は？」

「何時歸るか解らねえ」

紳士はふいと其處を去た。老人は再び元との沈黙に復つて、「小僧來い」とも言はずにすんく歩き出した。

二人は電車に乗た。

「あの人は何といふ名前だね」と虎吉は訊ねた。老人は黙つて居る。

「何處さ伴れて行くだね」

「……………」

「何といふ町かね」

「……………」

「何の商賣かね」

「黙つてるんだよ」

老人は初めて口を利いた。「黙つてれば可いんだ」

八

電車を降りて賑かな町を通つて幾つ目かの角を曲がつて更らに細い町から適宜に廣い町へ出ると骨董屋と水菓子屋の間に帳場格子の見える入口の廣い店がある。黒塗の横看板に正直屋と金文字が光つて居る。正直屋と虎吉は讀だ。

其入口の前に立た老人は何事か店の方に聲を掛けて直ぐ店に添ふて端れの木戸を押すと細い路が廂と廂の間に薄暗く露はれた。其れを入ると第二の木戸が横にある。老人はすん／＼其處へ入つた。と見ると何かしらん哩々物語る子供の聲、大八の聲が聞えて、右手に下駄箱、草履や耗た下駄や兵隊靴やが大小並んで居る。

室に入ると先づ眼に付いたのは自分と同じ年位の子供が二三人、十六七のが一人、埃だらけの頭をした大人が二人、寝轉ぶのもあれば坐つてるのもあり、子供

は賽を轉がしては茶碗を上うへに伏せ、其れを開けて見る度に二錢三錢と賭けた錢を取りつ取られつして居る。

「馬鹿野郎、晝日中遊んでる奴があるか」と寢轉んだ大人の一人が言ふ。

「晝日中だから遊んでるんだい」と子供の一人が言ふ。

「口の減らねへ奴だ」

「口が減つて堪るもんか」

大人は怒りもせず。「お前は豪えよ」と横を向いた。

「おい若い衆達」と老人は聲を掛けた。

「お仲間が一人出来たぞ」

「ふん、新米か」と例の十六七が精一ばいに胡坐を擴げて賽を轉がした。

「まあね、可愛がつてやつてくれ、ぼつと出だから」

一同の子供は此時初めて虎公の方を向いた。

「どうか宜しくね」

「お頼ん申しますせ」

虎公は何と挨拶して可いか解らなかつた、彼は田舎の犬が巡査を見る様な風

一種の反抗心を以て指を啣くはへて凝じつと先輩共を見廻した。

「指を啣へて居ねえで、仲間に入れて貰ふが可いよ」と老人が言ふ。「なあ蝙蝠、田舎者だから御手柔かにね」

「あゝ可いとも、君此處へ來給へ」餓鬼大將の蝙蝠君は胡坐を窄めて虎吉を磨いた。

「其れで可い、虎吉、お前は此の子の世話になるんだぞ」

何かは何らぬが虎吉は頭を一寸下げて一禮した。

種々な質問が續々と出る。

「お前何處だ」

「浅蟲だ」と虎吉が吼える様に言ふ。

子供はわつと関を作つて笑つた。

「おい朝飯つて土地は何處だ」

「馬鹿、朝飯ちやねえや、赤蟲と言たんだらう」

「何方の方だい」

「青森の海の側だよ」

「あ、青森か、言葉の解らねえ處だ、そら曾時ドロシた奴よ、彼奴は青森だせ、アイヌの居る土地だらう、なあお前」

「アイヌなんか居ねえや」と虎吉は故郷を罵られた腹立たしさに齒を剥き出して言つた。何が面白いか一同再び笑つた。

「お前は強さうだね」と霎時あつて蝙蝠が言ふ。「おい皆なで腕押をして見ろ」
「駄目だよ」と虎吉は微笑した。

「あにがハア駄目だアよ」と一人は虎吉の言葉を真似た。

「仲間入にや力比べをするんだよ」と一人が言ふ。

「やるべえ」と虎吉は腕を捲り上げた。

一人二人三人！誰しも敵はない。

「おい一番来い」と蝙蝠が進み出した。

虎吉は辭まなかつた。双方拳を握つて互に顔を疊に摺り付けて息張る、一人は十六、一人は十三、拳の大小を見ても勝敗の数が既に決まつて居る、けれども虎吉の腕は直立したまゝ、少しも動かなかつた。

「同じだ」一同は叫んだ。「勝負なし〜」

勝負はないが、虎吉の腕力には驚かざるを得ない。

「脛押をやらう」と今度は虎吉が申込んだ、勝つか負けるか何方かに決めなければ氣が済まぬ。

二人の脛と脛を合はして手拭で縛り、向脛の骨と骨を押し合ふのだから堪らない。此の場合力の強弱よりも永く痛さを憶へる者が勝である。二人は満面朱を注いで押し合つた。他の子供は勿論寝轉んで居た二人の大人までが首を突き出して双方に應援した。

蝙蝠が到頭負けになつた。

「お前は強いなあ、ふじ身だらう」と蝙蝠が言つた。

「痛え事は痛えだ」と虎吉は涙が零れさうになつたのを漸と憶へて言つた。

九

原始時代には、人を征服する者は腕力の強い者であつた。子供は人生の原始である。虎吉の腕力は他の子供達に充分の尊敬を懐かしめた。而して彼等の虎吉に對する態度は一變した。

夕方になると子供等は手ん手に一人去り二人去つた。虎吉は所在なさに外へ出て店の光景を見て居た。店の前には揭示杭があつて、其れに種々な紙札が貼つてある。月給二十圓の會社員十名募集す、美術自宅内職、外交員募集、海員募集、乳母女中酌婦募集、年金恩給低利貸金、地所家屋委託賣買など隙間もない程書列ねてある。是は噂に聞いた口入所といふものであらうと虎吉は臆げながら解つた。

「して見ると自分も何處かへ世話してくれらんだらう」
想う思つてる處へ、例の親方がのそりとやつて來た。「小僧何をしてるんだ、外

へ出ちや不可ねえ」

虎吉はびくりとして元の室へ引返した。什麼いふ理由か虎吉は親方に何か言はれると頭がぼうとして無意識に命する通に動く様になる。丁度鼠が猫に出會す様、自然と身體が萎縮んで自分ながら什麼する事も出来ぬ。

夜になると一輛の牛乳車が裏口へ曳き入れられた。蝙蝠を初とし、蠶だの茶釜だの土龍だのといふ練名の子供等が歸つて來た。而して銘々に箱車の中から品物を運び出す。靴、洋杖、帽子、雪駄、下駄、煙草、果物、中には洗濯物もあれば風呂敷包もある。

品物を前に並べて例の老人は一々數を改めた。

「おい蝙蝠、靴は十五錢だぞ、洋傘は二十錢、此奴は上等だ」

「あゝ好いとも、三十五錢だね爺やさん」

「ちやんくこを入れて五十錢」

爺は五十錢の銀貨を蝙蝠に握らせ。「其れから土龍！お前は？」

「爺やさん今日はあぶれたよ、車の蹴込と洋杖だけ」

「よし、二つで十錢だ」

憊ういふ工合に爺は一人く々に錢を渡したかと思ふと其れを風呂敷に包んで二階へ上がつて了つた。

「何だらう」と虎吉は思つた。

憊ういふ事を繰返してゐる中に三日は夢の如く去た。親分は一日の中三十分位此家に居るだけで滅多に顔を見せない。と其の翌日親方は虎吉を召だ。

「おい俺と一緒に來い」

言はるゝ儘に従いて行く。親分は一言も言はない。二人は淺草の奥山を歩いた。

「什麼だ、これは皆な活動寫真だぞ、面白いぞ」

虎吉は洋風の高閣、裝飾を極めた兩側、耳が豊ひる許の樂隊、紅黃綠紫の旖旎、木戸毎に好奇心を煽る木戸番の呼聲、其等を半ば驚歎と半ば歡喜の心を以て胸を跳らした。

「見たいか小僧」

「あゝ」

親方が先に立て帝國館に入つた。内部の立派さには外部よりも更に驚愕を増した、西洋喜劇の寫真を見る事ほんの十分間で親方は慙う言た。

「もう歸らう」

「もう歸るのかね」と名殘惜さう。

「ゆつくり見たければ此次に來い」

活動を出てから花屋敷、其れから汁粉屋、鮎屋、蕎麥屋、一日一ぱい眼まぐるしい程忙がしく種々な處を廻つて家へ歸つたのは十時頃であつた。

「小、面白かつたか」

「あゝ」

「又た行きたいか」

「あゝ」

「行きたければ仕事をして錢を儲けるんだぞ」

「どんな仕事けえ」

「明日になると解る」

虎吉は明日を樂みに煎餅蒲團に包まつた。が、今日一日見て來た天地、樂隊の響きが漲り渡る賑やかな歡樂の光景が何時までも彼の耳に眼に遺つて眠られなかつた。

眼が覺めると子供等は既に出て行た後であつた。今日は親方が仕事を授けてくれる。什麼な仕事だらうか、虎吉は親方の見えるのを待ちあぐんで居た。

二時頃に子供等が歸つて來た。而して爺やに啾々と叱言を言はれたが直ぐと例の賽を轉がし初めた。其れが濟むともう五時過。

「おい出るんだよ」と爺やが叫ぶと蝙蝠は直ぐ支度に掛つた。

「今日はね蝙蝠、新米が行くんだからドチを踏ましちや不可ねえよ」と爺やが言ふ。

「可いとも虎的かい」

「うむ、頼むよ」

蝙蝠は虎吉の顔を遠くからじろく睥めながら爺やと小聲に語つて居る。虎吉

は何となく胸を騒がした。

「おい虎的」と蝙蝠は學生帽に飛白の着物といふ扮装で庭口へ飛び下り「お前、仕事に行くんだよ、仕度をしろ」

「仕事つて何だね」と虎吉が言た。

「仕事は仕事だ、まあ黙つて來い」

虎吉は今一人の土龍と共に立上つた。

「おい是を着るんだ」

爺やが出してくれたのは白の半股引に縞の着物、烏打帽であつた。

「うむ、可い小僧さんが出來た」と爺やは笑つた。

庭へ下りると其處に一輛の箱車がある。過日は牛乳の車であつたが今日は黒塗で小間物さぬきやと朱文字が書いてある。頂天に三鱗の紋が付いて居た。

「さあ是を曳くんだ、お前は力があるから」と蝙蝠が言ふ。

「何處さ行くだよ」

「何處でも俺が可いといふ處迄だ」

「行かう」と身丈の矮さい土龍が促がす。

「行かう」

「車は空つぼでも可いのけえ」と虎吉が棍を取て言た。

「馬鹿ツ、空つぼだから入れて歸るんだよ」

三人は黙つて表へ出た。幾十町となく歩いて草臥れた頃、とある横町で蝙蝠が車を停めさせた。

「此處で待てるんだ、誰が來て什麼な事をしても物を言ちや不可えよ、何時でも蓋は閉めて置くんぞぞ」

土龍と蝙蝠が直ぐ姿を隠した。虎吉は二人の舉動に氣を留めず、東京へ出てから初めて仕事に有り付いた嬉しさと町々の物珍らしさに只だうっかりと四邊を見

廻して居た。日が段々斜になつて、町の片側は明るいが片側は暗い、電燈が彼方此方に輝いて居る。

「うつかりしちや不可えよ馬鹿野郎！」

と見ると蝙蝠が車の戸を明けて女下駄と洋傘を中へ推し込んで居た。

「おや」と思ふ間に直ぐに足を返して向ふの路次へ走り去た。其様子の如何にも慌たいしげなので虎吉は何となく不安を感じた。今ま彼の頭に俄然として起つて來たものがある。

「若しや」と彼は口の中で言た。「いや爾ぢやねえ」と取消しても見た。と今度は土龍が仄暗くなりかけた路次から豆腐賣の尻に跟いて狐鼠くんと出て來た。而し黙つて背中をもちくさせたが聽て坐蒲團一枚を出して其れを車の中へ押し込み、其儘何處かへ消えて了つた。

「泥棒だ」と虎吉は言た。「爾だ、其れに違えねえだ」

水を浴びせられた様に身體中が慄へ渡ると齒と齒がたたく觸れ合つて彼は車の周圍を夢中に廻り歩いた。と正面の方から土龍が再びやつて來た。

「駄目だ」と彼は言た。「場所を替へやう」

虎吉は黙つて漸やく身體の慄へを抑へた。

「なあ虎的、彼方へ行かう、此處は駄目だよ」

「何で駄目だね」と虎吉は眼を光らして言た。

「商賣にならねえや」

「何の商賣だね」

「つまらねえ事を言ふなよ」

「何の商賣だね」

「解つてるぢやねえか」

「何の商賣だね」

「おい大きな聲をするなよ」

「泥棒かね」

「止せつてば」

「泥棒かね、俺あ厭だよ、俺あ厭だよ」と虎吉は眼に涙を寄せて怒鳴た。

「俺あ歸るだ、俺あ厭だ」

「止せつてば止さねえか、馬鹿野郎」

「馬鹿野郎でも可いだ、泥棒よ可いだ」

「撲るぞ」

此時後方の方から蝙蝠が宙を飛で來た。

「やられたな」と土龍は早速に車の棍に身體を入れた。

「走れ」と蝙蝠が言た途端に虎吉の鳥打帽をひよいと取上げて自分の學生帽を虎

吉の頭に乗せるや否や、車の後を推して二人は韋駄天走り！呆氣に取られた虎吉

は只だ茫然と歩き出した。と追蒐けて来た二三人の足音！「泥棒！く」
店々から人が出る、女も走れば子供も走る、野次馬が黒山の如く虎吉を圍繞いた。

人々に圍繞かれた虎吉は我が身の上とも心付かぬ氣に只だ呆氣に取られて立て居た。

「泥棒だ」

「掏兒だ」

「掻浚だよ」

「いや迷兒だらう」

「種々の批評の中で一人は虎吉の襟をむづと攪んで力を込めて引倒した。

「なにをするだよ」と虎吉は起上らうとする其の横面に二つ三つ拳骨が降た。

「泥棒！太え餓鬼だ、さあ風呂敷包を出せ」

「俺あ知らねえ」と虎吉は泣聲になつた。

「なに？知らねえ？」と件の商人體の男は四邊の人々に向ひ、「煙草屋で買物をし
て、ちよいと御剩錢の勘定をしてると、ひよいと來て風呂敷包を掻浚つて走つた
んです、餓鬼の癖に本當に太え奴だ」

「撲つちまへ〜」と野次馬が叫び出した。

「交番へ渡せ」といふ者もある。

「何處の者だらう」といふ者もある。

「同類があるに違えねえ、訊いて見ろ」

「お前は何處か」と一人が言た。

「淺蟲だよ」と虎吉が言ふ。

「淺蟲？其那處はありやしないう、親があるだらう」

「無いや」

「親が無えのか、家は何處だ」

「知らねえ」

「此奴圖々しい奴だな、隠してゐるんだ、なあ小僧お前家を言はなければ監獄へ入
れられるぞ可いか」

「俺あ知らねえ、俺あ悪い事した覺は無えだよ」

「田舎つべだよ」と言ふ者があつた。

「なに田舎つべの振をしてるんだ、さあ小僧言はねえか」

「俺あ東京の町知んねえだよ」

「嘘つ吐き」と商人はこつんと耳の處を打つた。

「なにをするだよ、科の無えものを撲るつて法があるけえ」

眞黒な顔に朱を注いで、白い齒を剝出し、堪へきれぬ憤怒に全身を慄はして虎
吉は亢然として身構へた。

「品物を返せ」

「俺ら知らねえよ」

「撲つちまへ〜」

五六人がばら〜と虎吉の首を抑へ手を取り足を取つた。

「待て下さい」と人々の中を推分けて出た者がある。

「親方！」と虎吉は我を忘れて叫ぶや否や初めてわつと泣き出した。いかにも其人は親方であつた。荒い大島の上下に裾を端折つて白い股引を出し、靴を穿いて中折帽を前のめに被り洋傘を杖に突いて居る。

「何を泣くんだ虎吉」と親方は一喝して人々に向ひ、「私は南波爲藏てえ土木の請負をしてるもんだが、私の小僧に何か粗忽でもありましたかね」

「はあ是はお前さんの小僧さんですか」と商人は鼻息を荒くして言た。

「お前さんには御氣毒ですが此の小僧さんが私の包を掻攫ひましたんで」

「爾ですか、虎吉！手前其那事をしたか」

「俺あ仕やしねえ」

「爾だらう、これは何かの御見違でせう、此の小僧に限つて其那事はありません」

「併し私が後を跟けて來たんですから、此の帽子を見ながら騙けて來たんです」

こりや俺の帽子で無えだ、俺の帽子と蝙蝠が…」

「馬鹿ッ」と親方は笑つた。「ついで此頃田舎から出たばつかしだから…虎吉！手前は黙つてろ」更らに人々に向いて改まつて言ひ續けた。「私の小僧が盗んだといふなら私は警察でも何處へでも行て刑罰をして貰ひませう、がお前さん達が追掛けて來たんなら風呂敷包を小僧が持て居べき筈です、其れが無いのは什麼譯でせう」

「其れは其の…」と商人は行塞つて「背中へでも入れたんでせう」

「虎吉裸になれ」と親方は屹と言た。

「なるとも」と虎吉は帯を解いて着物を振った、かちんと落ちたのは虎吉が瘤の和尚から貰った二錢銅貨の一つであつた。

「什麼だい」と親方は突然商人の横面を撲り付けた、次で二人三人!

「さあ南波の小僧を泥棒扱ひにした奴は何奴だ、束になつて面を見せろ」
するりと羽織を脱いで虎吉の方に抛り出した。

一一一

見物人は一人去り二人去り、遠く離れて事の成行を眺めて居る。残つた五六人は荐りに頭を下げて謝罪つた。

「どうも親方の御小僧さんとは知らねえで飛だ失禮をしました」

「なあおい、俺も先刻から此の小僧さんは搔拂をするよな顔ぢやねえと思つてたよ」

「わけが解れば勘辨してやらあ」と親分は踵を返した。「氣を付けやがれ呆助め。：さあ虎吉一緒に歸らう、手前も茫然してるから帽子まで取替えられて此那事になるんだ、打棄つちまへ」

虎吉の被つた學生帽を滅茶くんに引裂いて人々の足元へ叩き付け其儘すんく歩き出す。虎吉は後に蹤いて悄然と歩いた。

「親分は馬鹿に威勢が好い」と心の中で驚歎した。

五六町も来たかと思ふと親方は急に足を返して、とある小路を曲り、曲つたかと思ふと同じ様な町をぐるぐる廻つて電車通に出た。

「小僧、驚いたか」と親方は此處で初めて言た。

「うむ」

「あの位の事に驚く様ぢや仕方が無えぞ、其れに蝙蝠の奴も馬鹿な行爲をしたものだ」と口の中でむにや／＼言て。「だがね虎吉、是から浅草へ行かねえか」

「うゝん」と虎吉は首を掉た。

「活動を見たくねえのか」

「見たいや」

「見たければ一緒に行かう」

「厭だ」

「何故厭だ」

「俺あ泥棒は厭だよ」

「ハ、ハ」と親方は肥つた腹に波を打たして笑つた。

「うむ可しく……だけれども小僧」

ちろりと虎吉の顔を覗いて往來の人々を顧でいや／＼つた。「彼處に行く人は皆な泥棒だよ」

「ふうむ」

「泥棒でもしなければ食つて行けるもんか」

東京は其那ものかと虎吉は思つた。親分は續ける。「なあ小僧、手前豪えものになりたくねえか」

「なりてえよ」

「美味しいものを食つてさ、美しいものを着てさ、好き放題の事をしてさ、可いか、

活動でも芝居でも、汁粉でも天麩羅でも……其の中にや道楽や勝負事も解ると止められねえ、なあおい、人てえ奴は贅澤をにしに生れて来たんだ」
虎吉は答へなかつた。

「其れともお前、年中びい〜で暮さうてえのか、乞食の子にでもなぶり度えかな」

「……………」

「働き次第でお前什麼ともなるんだ、豪えものになれば、何の商賣だつて同じ事だ」

「だけんど……俺あ厭だ、俺あ悪い事をするのは厭だ」

「爾か、手前本當に爾思ふか」

「親方！俺あ浅蟲へ歸りたくなつた、俺を歸して呉れつせ」

「弱蟲ッ」と親方は笑つた。「手前東京が恐くなつたのか」

「東京は恐くねえだ」

「何故歸るんだ」

「俺あ親方が恐えだ」

「仕様のない奴だ」

二人は家へ着いた。室の中には果物の皮や餅菓子、竹の皮などが散らかつて、蝙蝠、茶釜、蝨、土龍の面々が車座になつて鰻井を食つて居る。

「おい蝙蝠！」と親方は立て嚴かに言た。「手前巧え事をやつたな、新米を置いてきぼりにして尻が割れたら什麼する積だ」

蝙蝠は電氣に觸れた様にひよいと顔を上げて土龍と眼を見合はせ。「お、お、親方、そ、其れを……」聲が恐怖に慄へて居る。

「知てるよ、間拔奴、幾許あつた」

「そ、それは……なあ土龍」

「風呂敷包の中に幾何あつたと言ふんだよ」

「あの六匁と少し」

「どうした其れを」

「皆んなに奢つて後半分ばかり」

「此處へ出せ」

蝙蝠はびくりとして懐から墓口を出して疊へ置いた。

「虎吉！」と親分は命令的に言た。其のお錢は手前の分配額だ、取て置きねえ」

「厭だ」と虎吉は言た。

「腹が空つたらう、土龍、手前の井を與れ」

「俺あ泥棒の物は食はねえ」

「感心な心掛だ」と親方は笑つて去た。

何と勸めても金を受取もしなければ飯も食はぬ。一同は虎吉を持餘ました。

「抛て置け、今に食ふだらう」と爺やが言た。けれども虎吉は其儘其處に眠つて了つた。

翌朝になつても虎吉は空腹を泳へて飯を食はなかつた、而して淺蟲へ歸りたいと泣き續けた。

「可し歸してやらう」と親分は言た。其日の午後見慣れぬ男が正直屋の店に表はれた。

「虎吉！此人に從いて行くんだ」と爺やが言ふ。

「此の子ですかい」と男は虎吉をつくつく見詰めた。

「まあ世間を見て来るんだ、可いか、何處へ行ても同じもんだよ、厭になつたら俺の處へ來い」と親方が言ふ。

「お前は豪えものになりたいんださうだからな、其の心持だけは身性さ」

「何處さ行くだかかね」

此人 一緒に行くんだ」

「淺蟲で無えかね」

「淺蟲くつてお前、爾は不可え、汽車賃から食料、何一つ稼ぎもしねえちやねえか」

何處かへ賣られるんだと虎吉は漸やく合點した。彼は大人といふものには子供が絶對に抵抗する事が出来ない様な氣がした。丁度鷲の爪に握られた小鳥の様に彼は自分の身體を運命に任せながら眼を閉つて慄へて居た。

虎吉を買取た男は霎時五圓とか十圓とか爺やと言争つて居た。「自分の身代だ」と虎吉は思つた。

「可し、十五圓」と二人は手を拍た。虎吉の身體は品物の如く爺やから男の手に移つた。

虎吉の賣られた處は、猿芝居の一座である。泥棒よりも遙かに可いと虎吉は思

つた。一座は五頭の猿に四匹の犬、其れに興行師、番頭、仕打を交せて大小共に七人、男の子もあれば女の子もある。何れも營養不良の顔色をして狡猾さうな眼付をして居る。此の一座は旅から旅へと歩いた。虎吉は力の強い處からして大人並に小屋掛、荷造、運送の役に當てられた。朝から晩、夜は十二時頃まで働かねばならぬ。身體の使ひ込が酷しい割合に三度の飯が至て少い。其れで若し少しでも厭な顔をするると親方の鞭が直ぐに横面へ下される。いくら強くても年は僅かに十三、流石に聲を忍んで泣く事が屢々であつた。

虎吉の嫌なのは猿であつた。此の狡猾い動物は不思議にも人の區別を識て居る。親分の顔を見ると媚びる様に狎へた聲を出して身體を擦り寄せるが、傭人共に對しては極めて横柄で中々言ふ事を聴かぬ、叱れば唸り返す、打てば逆らつて來る。「お前達は奉公人の癖に生意氣な」とでも言ふかの様。大人には其れを恕すの雅量があるが虎吉は子供である。彼は本氣になつて猿を憎んだ。而して黒い鎧を着

て熊谷になつた猿が、斑犬の馬に跨つて扇を揚げて威張る面を見ると堪らなく猿に障る。同じ畜生でありながら馬にされてる犬が可愛さうだとも思つた。

此の憎惡が破裂して彼は或時猿をしたゝかに撲つた。猿は悲鳴を擧げて倒れた。

「手前の様な奴は死ばつちまへ」と親方が怒鳴つた。

「俺あ人間だ、猿よか貴いんだ」と虎吉も力み出した。

親分は呆れて此の頑冥な子供を瞋めて居たが、「手前は什麼しても使へねえ奴だ」と呟した。

其の日彼は二十四で第三番目の親分に移つた。馬關の船着場で石炭仲仕の荒稼をするのである。

此の商賣も永くは續かなかつた。幾ら稼いでも借金の減り様がない。彼は炭坑の坑夫に賣られた。一度び坑夫となつたものは終生浮む瀬がない。彼は十四歳と十五歳の年を此の活地獄の中に送つた。

「俺は何なるだらう、何時豪いものになるだらう」

彼は十六の冬、到頭繩帯を締めたまゝ坑内を逃出した。人の軒に立て貫ひ歩いては櫻の花の咲く頃、大阪へ着いた。而して再び労働者の群に入つた。運命は更らに彼を翻弄した。彼は何時の間にか賭博宿の見張番になつた。幾度となく警察へ拘留された。無籍者の虎吉といふ名は刑事巡査の手帳に注意すべき少年として記された。

「俺が何にも悪くねえのに何だつて俺ばかりを拘留するんだらう」と彼は思つた、

而して其度毎に「俺は子供だからだ」と判じて居た。

「いくら善い人にならうと思つても爲れないから仕方が無え、文公やお嬢ちゃんが見たら俺を何と言ふだらう」

考へれば悲しくなる。彼は又々乞食旅行を企てた。伊勢の大神宮様に御詣りして長い間涙を流して祈つた。「どうか豪いものにして下さい」

彼が東京へ着いたのは十九の晩春、夕暮の灯が品川の町に點き初めた頃であつた。懐にあるのは只た八錢、是で飯を食はうか、但は木賃宿へ宿まらうか。彼は急に電車へ乗つて見たくなつた。降りるともなく上野で降りた。而して何時の間にか石段を上つた。西郷様の銅像が依然として立て居る。淺草方面の眺望、正面の電車通、行く人歸る人、周圍の櫻樹、凡て眼に觸るゝものは六年前と毫も變はらぬ。

彼は茫然と下の町々を眺めながら柵に凭れて深思に沈んだ。あの時は子供であ

つた。肩揚をした綺の着物を着て、正直屋の親分と一緒に此の木の下に立た。其れが東京を見初めた第一日であつた。

あの時は、早く豪い者になり度い、屹度なれる、什麼してもなる、といふ前途の光に心が酔ふて居た。此處に群がる人、彼處を行く人達の顔が嬉しさに輝やいて見えた。而して自分に對つても早く豪くなれと言ふかの如く見えた。

が、あの時は既に自分の身體に暗い影が射して居たのであつた。六年！あゝ六年！淺蟲を出てから六年！六年の中に自分は泥棒の群に入た。猿の奴隸になつた、石炭仲仕！坑夫！賭博宿の手先！乞食！

虎吉は聲を出して泣いた。暗がりから暗がりへと人目を避けて泣き歩いた。其の中に怵へきれぬ程腹が空いて來た。彼は電車に乗るよりか飯を食へば可かつたと後悔した。爾思ひながらも又泣いた。

「おう、虎的ぢやねえか

突然彼れの耳に聞慣たれ聲が響いた。虎吉はびくりとして振向いた。

「おう爾だ、俺よ」

眉深の帽子を　り上げると、正直舎の親分南波爲藏であつた。虎吉は脊中

から水を浴びせ　様に驚いて飛退つた。

「好い若い者になつたな、其後は什麼したい」と狂れしく肩に手を掛けて。

「些とは景氣が好いかね」

「知らねえや」と肩を揺ぶつて歩き出す。

「まあ可いよ、どうだい久振だ一杯やらう」

「厭です」と虎吉は明晰と言た。

「ふうむ、口の利き様も全然直つたね、可い男前だ、さあ一緒に行かう」

「行きません」

「爾か、酷く嫌つたもんだね」と爲藏は笑つて。「恚う振られちや仕方が無い、だ

がお前大分疲れてるね」

「餘計なお世話だ」

「ハ、爾那事を俺に言ふ様になつたね」

爲藏は思切た様に一二間歩るき出した。

「親方！」と虎吉は急に呼止めた。

「なんだ」

「俺に何か食べさしてお呉んなせえ、腹が空つてやりきれねえ」

恚う言て了つて虎吉は直ぐ飛んでもない事を言たと思つた。

「ハ、だから剛情を張るもんで無えといふんだ、見つとも無え奴だ、若え者が飯屋へ入る事も出来ねえなんてハ、、、從いて來い」

一五

爲藏はのしり／＼と歩き出す。後に虎吉は悄然と從いて行く。吾れながら情ないと思つた、爾思ふもの、既う腹が空いて堪らない。

「なあおい」と爲藏は振返つた。「お前仍且貧のかい」

「あゝ」

「六年になるね、六年も経つたら些とは什麼とかなりさうなものぢやねえか、豪い人によ、ハ、爾だお前豪い人になるのが志願だつたけね」

虎吉は顔を赧めて口の中で何か言た。

「なあ虎的、豪くなりやしまい、爾だとも、お前達の様に理窟で固めた日にや豪くなれるもんぢやねえよ」

「どうすれば豪くなれますかね」

「太く短くだ、早え話は今の豪え人達は皆な泥棒だ」

「もう可いよ、親方の言ふ事位は解つてらあ」

「感心だ、其れが解れば些たあ話せる様になつたね、大阪で修行したかい」

「知てるの？」

「うむ知てるとも、俺だつて年に二三度は上方へ行かあ」

「はあ」と虎吉は變な聲を出した。自分が警察へ拘留された事も知てるに違ひない。

彼は突然逃げ出した。

「おい什麼した」と爲藏は足を早めて近付いた。

「俺あ親方と一緒に行くのは厭だ」

「厭なら厭で可いや、飯だけは食つて行けよ」

虎吉は又も足を戻した。「御馳走にならうかな」

「氣の小せえ奴だ……さあ此處へ入らう」

角行燈を圓く切抜いて「鳥」と書いた小料理屋へ二人は入つた。虎吉は銅に噛み付く様になつて茶碗の音をさして食ひ初めた。

「うんと食へ、食へるだけ食へ」

「済まねえな」

「呑つたれた事を言ふな」と爲藏はつくつくと憐れむ様に虎吉を見下して。「どうだい、女郎買の味を覺えたか」

「知らねえや」

「馬鹿だな、だから出世しねえんだ、女は嫌か」

「知らねえや」

「好きだけれども錢が無えんだらう」

「ハ、ハ」と虎吉も笑つた。

「意氣地なしめ」

「親方は毎も威勢が好いな」と虎吉は腹が充分になつたので徐々元氣を恢復した。

「當り前よ、手前達とは違はあ」

「仍且何ですか、あの商賣で」

「爾だ、遊びに来な」

「蝙蝠は何もしました」

「彼奴今ま入獄ひ込んでるよ」

言葉が霎時杜絶れた。

「ねえ親方」と虎吉は親方の杯に酒を酌いでやり「俺あ御願えがあるんだが」

「解つてるよ、錢だらう」

「あゝ」虎吉は體裁悪さうに首低れた。

「旅費だらう？」

「あゝ」

「淺蟲へ歸りてえんだらう」

「あゝ」

親方は哄笑した、虎吉は何もして自分の肚を見透かしたかを怪しむものゝ如く顔を上げた。

「何處までも出世しねえ様に出來てらあ、錢が慾しけりや貸してやらあ、お前なんか人から錢を借りて土産ものを買て田舎で威張らうてえ玉だ」

「其那事は無え、旅費だけ」

「お前は俺を汽車の切符係だと思つてるね、來る時も俺、歸る時も俺、能く出來てらあな」

「貸してくれますか」

「うむ」

「何時？」

「今夜でも可いよ、今此處でといふわけにや可かねえ」

「ちや何處で」

「まあ緩くり飲め」

爲藏はころりと横になつて肝を搔いて眠り初めた。

一六

爲藏の眠るのを見て居ると自分も眠くなつた、晝の疲勞、腹の充満加減、少し許の酒の氣で虎吉もうとくととなつた。此間幾時間経たか知らぬ。

「さあ起きなよ」

爲藏に起されて眼を覺ましたのは最早や十二時を過ぎた頃であつた。華客と見えて女中達の如才なき御世辭賑はしく二人は門を出た。

「好い心持だ、歩かう」

親方は鼻唄を唄ひながら緩くりくと歩く、何だか恁う親方に釣られてる様、
「どうせ貸してくれるなら早く貸してくれると可いのに僅か四五圓の汽車賃ぢや
ねえか」

虎吉はぶつ／＼言ひながら左りとして催促する氣にもなれず、何處までも爲藏の

後に従いて行た。「此那事をして什麼なるだらう、どうせ碌な事がありやしない、寧ろ斷念つて逃げ出さう」憊う思つて足を停めると爲藏はひよいと背後を振り返つて「はッくはッ」と笑ひ出す。其の度毎に虎吉は肚肝を抜かれて又もや後に従いて行く。

赤電車を見てから小一時間、二人は緩りく歩いて、とある町に出た。其處は石造や煉瓦の見上ぐる許の大きな建物のある町で、其等は巨人の如く暗い影を半空に翳てゝ居る。

「此處は何處ですか」と虎吉は宛然西洋の様だと思ひながら訊ねた。

親方は返答もせず足に急を早めて橋を渡つた、狭い川が闇の中に覺束ない薄明を流して居た。

「小僧ッ」と親方が忍び聲で言た。

「氣を付けろ」

「何を？」

「馬鹿ッ」

虎吉は頭から何物かに抑へ付けられた様に息が詰まつた人の如く黙つた。二人は路傍に積んだ煉瓦の後に蹲がんだ。暗い提灯が遙に見える、拍子木を打て一人の爺がさうに歩いて来る。「はてな」と虎吉は思つた。

と、火の番を行り過して爲藏は急に頭を上げた。

「小僧来いッ」

小僧ッ—此の聲を聞いたのは何年振だらう、彼は諸國を放浪して居る間にも、彼の耳に從いて離れなかつたのは「小僧ッ」といふ呼聲であつた。抑々東京へ出た時に自分の運命を握つたのも此の呼聲である。「小僧ッ此處へ来い」「小僧ッ箱車を曳け」「小僧ッ猿芝居へ行け」命せられると毫も反抗が出来なくなる。此の呼聲は虎吉に取つては一種の催眠術である。「俺は一人前の男だ、もう昔の小僧ではな

い」肚の中で力んで見るものゝ親方の一聲を聞くと什麼する事も出来ない。

二人は懸て煉瓦塀の前へ来た。

「小僧手前は金が欲しいか」

「あゝ」

「欲しけりや仕事しろ」

今までの寛濶な親分とは異つて、低聲ながら屹と言放す言葉は刃の如く鋭い力がある。容易ならざる事が出来るんだと虎吉は思つた。

「仕事つて何ですか」

「此の塀を乗越えろ」

「えつ？」

「確乎しろ」

親方は袂から鉤の付いた繩を出して兎角上を睨めて居たが、ひらりと抛げ出す

と鉤が塀の端に掛つて繩は梯子の如く垂れた。

「厭だあ」と虎吉は泣聲になつた。

「馬鹿ッ、黙つて乗越えろ、向へ廻つたら潜戸を開けるんだぞ」

「親方、泥棒だけは勘辨して下さいよ」

「厭か」親方の聲は鋭い。

「えい」

「どうしても厭か」

「えい」

「本當に厭か、行けッ」

「へえ」と虎吉は彈機仕掛の鼠の如く飛上つた。而してするくくと繩梯子を攀ち上つた。

「上つたら繩を向へ刎ぬ返すんだぞ」と親方は聲を掛ける。

據が立ちさへすれば可いんだ」

彼は急に明るい氣持になつた。誰か来て捕へてくれれば可い、爾すると自分
は自分だけの辯解をして此の邸から出して貰ふ。

「仍且俺は豪いな」と彼は思つた。而して彼は大膽に歩き出した。けれども人の
影も見えない。「誰か来るだらう、此の家は随分大きな家だが夜番位は置きさうな
ものだ」

彼は段々奥へ入つた。仍且人が来ない。寧ろ聲を出して人を呼ぼうか、何と言
はう、泥棒だくと怒鳴らうかしら、爾すると俺を強盗と思つて驚くだらう、其
れは氣の毒だ、第一騒ぎが大きくなると困る。其れぢや助けて呉れい！其れも不
可い、何だか弱さうだ。

彼は思案しつゝも椽側近く、雨戸／＼の隙を覗き廻つた。

一廻り廻ると離室へ出た。「おや此處にも室がある」彼は雨戸に添ふて暗まざれ、

手さぐりに軒下を曲り行くと脱捨てた下駄に躓いて踏跟と倒れ掛けた。はつと思
ふ間もなく押戸がぎいと音して彼は片足に草履を穿いたまゝ廊下へ踏込んでしま
つた。

其儘耳を濟ますと奥に軒の聲！

「占めた」と彼は歩を進めた。押戸が再び元に返ると外の薄明が消えて廊下は黒
暗々！

行けば行く程軒が遠くなる。足を返さうとすると方角が解らなくなつた。

「可しッ、誰か眼を覺ますだらう」足音高く踏みながら鼻の向く方へ幕地に進む
と、微かな灯の影が襖の横合から漏れる。彼は最早や何の考へもなく突然襖を明
けた。

明るい電燈の下に涙の痕を背に残したまゝ熟睡して居たのは篤子であつた。

篤子は夢かと許り虎吉の顔を見詰めた。虎吉は餘りの驚愕に言葉も出なかつた。

「まあ什麼して來たの？」

「泥棒の親分に連れられて來たんで」

「泥棒は何處に居るの？」

「表に待つて居ます」

篤子は悚然と身を慄はした。

「大丈夫だ、俺が出て行かなければ俺が捕まへられたと思つて親分の奴逃げて行くに決つてるから」

「爾？」と篤子は安心した。六年の昔に別れたきり、虎吉は什麼な人間になつて什麼な商賣をして居るか其那事は篤子の頭に露ほどの不安にもならない。形こそ

變れ、ほうけた汚ない頭をして泥だらけの着物を着て居るとは言へ、又た今は自分も一人前の女、虎公も一人前の男になつたとは言へ、彼女の眼には淺蟲のお濱の爐邊でめんこをして遊んだ凸凹頭の虎公としきや見えなかつた。虎吉も仍且篤子を見て昔のお下髪に結て凍傷に膨れた小さな手を呼吸で温めながら竹杖の尖で雪の窟を作つて居た篤子も今の篤子も同じ様な氣がした。

起き上がつて篤子は寢卷姿の儘、布團を片寄せ、自分の坐布團を虎吉に與へ、顔と顔が密接くばかり摺り寄り寄て虎吉の物語を聞いた。一別以來の苦楚艱難、口は重いが誠實が籠つて居る。

夜が更け渡るに伴れて二人の話が纏綿として湧いては流れ、流れては互の腸に泌み込んだ。虎吉が炭坑を逃げて三日間食はずに走つたといふ物語の時、篤子は聲を忍んで泣いた。「貴方は幼さい時から御飯に不自由して來たのね」と言つた時、虎吉は首を低れて言つた。「其りや俺の劫といふものだ、いくら焦躁しても運にや勝

てねえ」

篤子も自分の身上を言葉少に語つた。「貴方に比べると私は本當に幸福だ」と彼女
女は言た。「貴方が幸福なら俺あ本當に安心した、什麼かね何時までも幸福で暮ら
して下さいよ」

彼一句、是一句、話の種が盡くべくもない、二人は今東京に居るのだといふ事
も、泥棒に入つたのだといふ事も、何も彼も忘れて只夢の如き不意の嬉しさに精
一ばいの血を踊らしながら互に若々しい頬を熱らして清らかな眼と眼を見合つ
た。お濱の事、文公の事、聞く度毎に虎吉は歎息した。「俺ばかりが苦勞してるか
と思ふと、文公の方が俺よりも苦勞をしてるんだ、氣毒だなあ……してお嬢ちや
んは？」

「私苦勞が無いのよ、だけれども乳母も文ちゃんも貴方も皆な幸福になる様にね
……其ばかりが苦勞だわ」

二人の言葉が途絶れた、何處かの遠くで鶏が鳴くと雨戸の隙が微かに白んで來
た。

「ぢやねえお嬢様、什麼かね御無事でね」

「もう行くの？」

「夜が明けますからね」

「其りや爾だけれども……」

「又たちよい〜御門前へでも來て御眼に掛りませう」

「ぢや又た來てね」

「お待ちなさいよ」と篤子は机の抽出から藝口を出して。「これを持って被行しやい」

「要りません」

「いくらもないのよ、たつた六十錢位、其れより無いんだから」

「要りません」

ねばならぬ。篤子は疊に突伏して泣いた。

「道理だ、辛いでせう、其りや中々言へない事だ」と仙七は兩戸の蔭で是も四苦八苦に身を悶いた。

「什麼しても言はないの？」

「……………」

「何故言はないの？言て了へば済む事ぢやないの？叱らないからお言ひなさい」

「あうの……私のお友達で……」

嘘を御言ひなさい、男の聲がして居たちやありませんか」

「えい、男のお友達で」

「爾でせう」とお時は微笑した。「爾でせう。其れは何といふ」

「あの、其れはあの……田舎の……」

「まだ嘘を吐くのかい、もう可いよ、解つてるよ、お前が言ひ惜ければ私が言て

一九

虎吉を夢中に送り出した仙七は其儘足を返して篤子の室の前へ來ると、もうお時の腹立聲が聞えた。

「さあ誰ですか早く御言ひなさい」

「御免なさい、伯母さん」

「御免なさいでは済みません、今まで此處に居た男の名前を御言ひなさい」

「あの、其れは……あの」

言ふのは易けれども虎吉だと言たら直ぐ泥棒として虎吉は追躡された上に捕縛されるだらう、言はなければ伯母に叱られる。叱られても朝夕に戀しかつた昔馴染を什麼して罪人にする事が出来やう。嘘を吐くのは人間の最も慎むべき事だと、幼さいから是ばかりを乳母に戒められたのだが、嘘を吐かねば友達を牢舎へやら

ねばならぬ。篤子は疊に突伏して泣いた。

「道理だ、辛いでせう、其りや中々言へない事だ」と仙七は雨戸の蔭で是も四苦八苦に身を悶いた。

「什麼しても言はないの？」

「……………」

「何故言はないの？言て了へば済む事ぢやないの？叱らないからお言ひなさい」
「あうの……私のお友達で……」

嘘を御言ひなさい、男の聲がして居たちやありませんか」

「えい、男のお友達で」

「爾でせう」とお時は微笑した。「爾でせう。其れは何といふ」

「あの、其れはあの……田舎の……」

「まだ嘘を吐くのかい、もう可いよ、解つてるよ、お前が言ひ惜ければ私が言て

あげやうか、力さんだらう？」

「えつ」と篤子は驚いて顔を上げた。

「力さんだらう、今此室に来て居たのは力さんだらう、解つてるよ、お前が秘してももう駄目ですよ」

「いゝえ伯母さん」

「もう何と言ても駄目です、私が見たんだから、お前はまあ何といふ大膽な行爲をするんです、未だ子供だと思つたら力さんを毎晩の様に居室へ引摺込むなんて、其那事をしろと學校で教へましたか、お前が其那行爲をするとね、世間から笑はれるものは私ですよ、此の伯母さん一人ですよ、田舎から飛出して一人で帯を結める事さへ知らなかつたのを六年間手鹽に掛けて漸と世話が焼けなくなつたと思ふと、もう此那猥らな事をしてる。お前が御手本を出して見せると環までが傳染らないとは限りません、もう厭だ、もう顔を見るのも厭だから出てお出、此邸へ

は置く事がありません」

「力さんではありません」と篤子は殆んど夢の様に慄へながら言た。

「剛情だね此子は、其れぢや誰ですか、力さんでなくて誰ですか」

「無論僕ではありません」と言て其處に力の姿が現れた。夜は既に明け放れて琢磨も環も入口に立て居る。廊下には二三の女中共が恰も興味深き問題の如く身體を斜に室内を覗きなどして聞て居る。

「何を聞てるんです」とお時は怒鳴つた。鶴の一聲女中共は互に顔を見合はして遠くへ離れた、而して同時にくすりと笑つた。

「僕ではありません」と力は繰返した。

「力さんぢやないかも知らないけども今日は特別にお早いのね」と環が言ふ。

「こんな騒ぎに寝て居られますか、伯母さんは何故僕だと断定なさるんです」

「平素に仲が好いからでせう」と環が又もや首を出して願で篤子をしやくる眞似

をする。

「環さん、貴方に聞てるんぢやありませんよ」と力はふり／＼してお時に詰め寄る。

「でもね」とお時は沈着き拂つて。外に若い男が此宅にないから……」

「あります、琢磨君だつて若い男です」

お時はひやりとした様に琢磨を見詰めた。

「僕は／＼僕は」と琢磨は吃つて。

「力君、君は失敬だね」

「失敬は御互様だよ、君の御母様が第一に失敬ぢやないか」

「併し僕は……」

「僕だつて迷惑だ」

力と琢磨は互に疑ひと嫉妬の念を以て顔を見合つた。

力ちからでないとするれば琢磨たくま、琢磨たくまでないとするれば力ちから 此室このへやへ入るものは他に無い。
二人ふたりが互たがひに疑うたがふ如ごとく環たまごも疑うたがひ出した。

「豊夫よもつ兄にいさんではあるまい仍やつぱり且つと力ちからさんだらう」

得え知しれぬ嫉妬しつとが胸むねに昂のぼつて来る。と、お時は最はやく前まへ後ごの考かんがへ無なくなつて居る。
彼女かれは丁度ちやうど赤あかん坊ぼうに鼻毛はなげを抜ぬかれた様な氣きがした。折角せつかく自分自分が環たまごと力ちからとを妻めづはせやうと苦心くしんして居たものが、釣つた魚あなは自分の鈎かぎを脱ぬけてまんまと他所よその人に持もつて行いかれた。小娘こひなめだと思おもつて油斷ゆたんをして居たのは何なによりの失策てんさくであるが、自分自分で失策さくだと思おもふだけに更に忌々いざいざしい。縦令しんはな琢磨たくまであるとした處ところが、此那貧乏娘このなびんはなめを息子むすこの嫁よめにするのは馬鹿ばかくしい事ことだ。彼女かれは何なにれにせよ此この騒さわぎを大おほきくして篤子とくこを追出おっす事ことが賢かしい所しよ爲わざだと決心けつしんした。

「兎も角とくもかくもね、力ちからさんにしろ琢磨たくまにしろ男をとこが女をんなの室へやへ入るなんて事ことは可いい事ことではありません、他の事ほかと異ちがつて是こればかりは屹度きつと糺たださなければなりません、ねえ篤子とくこ、お前の身からだ體たいから出た事ことだから明瞭めいりやうとお言いひなさい、さあ誰たれですか」

「……………」

「言いへないの？ 力ちからさんでせう」と環たまごが言いふ。

「……………」

「篤子とくこさん」と力ちからは激昂げききやうした顔かほを向むけた。「貴方あなたが言いてくれなければ僕ぼくが困こまります、此こ通とおり僕ぼくに冤罪えんざいが被かつてるぢやありませんか、其それは琢磨たくま君くんにしろ誰たれにしろ、此この室しつへ入はいつた者ものがあつたとしても僕ぼくは貴方あなたの潔白けつぱくを信しんじたいです、貴方あなたが本當ほんたうに潔白けつぱくであれば誰たれが此室このへやへ來きたかを明あらかに言いひ得える筈はずですからな」

「私わたしは、私わたしは」と篤子とくこは涙なみだに濡ぬれた顔かほを上げて力ちからに訴うつた様やうに言いつた。「私わたしは言いへません」

「何故ですか」

「……………」

「言はなければ困る」と琢磨も言た。

「言はないの？もう可いよ、其れちや今から此處を出て御しまひ、一時も置く事はなりません、さあ出て御出、お前にはね乳母があるから可いだらう、却つて嬉しからうさ」

「御免なさい」

「何？御免なさい？其れちやお前に悪い事があるんだらう」

「私……」と篤子は凝と瞳を据ゑたが此時彼女の唇はふるくと波を打た。「私には悪い事ありません」

「ハ、ハ、ハ」と環は大口を開いて笑つた。「まあ圖々しい事」
「其れで可い、もう何にも言はないから出てお出」

膝をかくくさして疊を蹴る様に音させながらお時がくると踵を返さうとする途端に椽の押戸をすうと開いて仙七は不意に躍り上つた。

「一寸御待ち遊ばして、私から申上げます、私から……」

頭は埃だらけだが熱した兩頬は薄紅く輝いて居る。彼は幾度となく手を突いて頭をびよこく下げた。

「篤子様、何故仰しやらないのです、早く仰しやれば何でもない事ぢやございませんか」

「言へないぢやないの？」といふ篤子の聲は殆んど聞き取れなかつた。

「お前は知つてるのかい、仙七」と環が言ふ。

「えい知て居ますとも、私は當人でございます」

「えつ？」と四人の眼と眼は一度に見合つた」

「仙七！」と篤子も驚いて制める様に言ふ。

「黙つて被居やい……私は當人です私は此方の室へ入りました」

「何の用事があつて來たの？」

「其れは其の……」

「言へない用事なんだらう」

「實は其のう」と仙七は答に困つた、見るに見兼ねて飛込んだものゝ其處まで考へる暇もなかつた。

「丁度其のう、起きて見ると早いもんですから一寸其のう」

「一寸什麼したんだい」

力であるとするれば環との事が當が外れる。琢磨であるとするれば篤子を背負ひ込まねばならず、進退谷まつてるお時の眼の前に仙七が現はれたのは地獄で佛である。奉公人と密通したとあれば篤子を追出すに是程好い口實が無い。

一一一

「えい？什麼したんだい仙七」

「實はね、其の、何なんですから、鼠が出たもんですから其れを追掛けて」

「へえ、鼠が……嘘をお吐きでないよ」

「嘘ぢやありません、鼠は何處へでも出るもんで」

「其れぢや何故庭の方へ逃げたんだい」

「其れは其の鼠を追掛けてたんで」

此時人々の背後から「巧いぞ、いよう巧いぞ」と聲を掛けたものがある。總五郎が何時の間にか立て居た。

「巧え事を言たな仙七、鼠とは巧えな、爾だらう、爾だらうとも鼠さね、鼠に違えねえよ、だがお前の鼠ぢや篤子も嚙られる心配は無えハ、」

「何を仰やるんです」とお時は眉を動かした。

「まあ可いよ、これは預かりだ、可いか、鼠てえ奴はな、處嫌はず出るものだよ、其れを取締るのはお前の役目だ、可いかな、篤子の室でも環の室でも、よつく締りをしなけりや其ら鼠が出るよ、環なぞは餌の方から鼠の處へ轉がり込んで行く方さ、ハ、ハ、ハ、いや爾だ全く爾だ、俺だつて仍且鼠の方だからな、頭が禿げちや溝鼠かな、交番へ持て行ても三錢にもならねえ奴さ」

「眞面目な話ですよ」

「爾とも眞面目とも、だから此の事は預かりだ」

「こんな猥らな事をして黙つて見てると仰やるんですか」

「猥らか猥らでないかは解つてるぢやないか、相手が仙七だよ、可いか、まあ難かしい事は言はねえで、今後を懲らしめるなら懲らしめる、言ふだけ言たら其れで可い、いや篤子の事ばかりぢやないよ、環の方も氣を付けなけりやな」

「私は何をしたらと仰やるんです」と環は眼に稜立て、唇を曲げた。

「何でもないよ、お前は好い子だよ、其ら怒つた、怒ると益好い顔になるよ」「知らない！」と環はくるりと背後を向け袂を振て外へ出た。

「では御父様！」とお時は苛立たしく起上つた。「私が此子の躰をしやうとすれば貴方が横合から壞して了ひなさるんですから今日から此子の事は一切構ひません、何かと言ふと繼子苛めでもする様に取りなさるんですもの、何卒ね其のお積でハイ左様なら、私は何にも知りませんから」

お時の去た後で琢磨も力も黙つて去た。

「なあおい」と總五郎は仍且立つた儘仙七の低れた頭を見下して言ふ。

「仙七ッお前は能く言てくれたな、感心、全く巧くやつた、がねえ、人の罪を背負ひ込むのは可いが、お前本當に鼠になつちや不可えせ、ハ、ハ、可いか、後後で褒美をやるよ、店へ行て待てろ」

「旦那、私は……私は」

仙七は耳根を紅くして何か言はうとするを遮つて總五郎は「まあ可いよ、飯でも食つて店へ行け」

仙七は篤子の低首れた顔を覗きく室を出た。

「なあ篤子」と總五郎は優しさうに言た。「仙七が彼様言たから助かつた様なものの、是からは氣を付なくちや不可えよ、力だつて今が修業中だしお前も未だく早えから、此那に人目に立つ様な事をしちや不可え、どうせ力が大學を出たらお前とまあ芽出度く祝言させる積なんだからね、何も危ねえ橋を渡るにや及ばねえ事だ、可いか、其りや若え時はな一寸其のう、一寸な、氣が急くもんだけれども、將來の事を考えると……」

「御祖父さん何を仰やるの？」と篤子は漸と總五郎の言はうとする意味を臆氣ながら覺つたので顔を眞紅にした。「力さんでもなければ仙七でもありませんわ」

「まあ可いよ、俺だつて萬更ら經驗の無え事でも無え、野暮は言はねえから安心するが可いよ、なあ篤子、環なんかに負けちや不可え、お時の鼻を明かしてやるが可いさ、だがねえ世間の口が煩さいから其れだけは氣を付けなくちや、可いか、解つたか」

「解りませんわ、御祖父さんは何かお考へ違をして被居やるんぢやないの？」

「可いよく解つてるよ、無理も無えが少うし早い、嬰兒でも出來たら什麼する」

「御祖父さん」と篤子は羞かしさを忘れて總五郎に詰寄らうとした。總五郎はにや／＼笑ひながら「無理も無えが氣を付ける」と同じ事を繰返しながらさつくと出て行て了つた。

「餘まりだわ、餘まり酷いわ」と篤子は口惜涙に咽び泣いた。篤子の涙は處女の矜持を傷つけられた純潔な憤怒の涙である。此の涙の意味は無論總五郎に解るべ

き筈がない。襖の蔭で涙き聲を聞いた總五郎は再び顔だけをぬつと出した。

「泣く程の事でもないよ、思ひ合つた仲なら出来たつて仕方がないさ、なあに俺が添いてるから大丈夫だ」

篤子は最早涙も出なかつた。「お祖父さんも伯母さんも什麼して恚う卑しい事はつかり思ふんだらう」

彼女の心の中に今まで思ふた事もない感情が萌し初めた。其れは祖父と伯母とを蔑すますに居られない事である。「何といふ厭な家だらう」と彼女は思はず咬いた。

急流

玉蘭女學校の卒業式は無事に済んだ。篤子は十八で本科だけは卒業した、更に二年別科をやらねばならぬ。嫁入の賣口のあるものは本科だけで止むが、縁遠き女は別科に留まつて徐ろに形勢を案するのである。

此の學校の特色は卒業式よりも式の五六日後に催はす校友會である。既に卒業して人妻になつてる女も、現在の生徒も未亡人も子持も此校に關係のある女は悉く集まつて一日を遊び暮らす、といふのは名義だけで實は例の結婚媒介の爲である。左れば當日は校友の家族若くは親戚といふ名の下に男子の來會勝手次第といふので、用事のない者までが雛祭見物といふ心持で出掛ける者も少くない。

校友會は年々某華族の庭園で開かれたのだが、今年は差支あつて其が斷られたので前原校長と夫人の假名子は途方に暮れた。

「生徒の中で誰か廣い邸を有てる父兄がありさうなものだね」

「爾ですな、名簿を見て見ませう」

二人は生徒の名簿を繰出した。「どうも華族様は一人も無くなつたから困りましたね」

「一人あるぢやないか、鷲田男爵」

「不可せん、あの華族様は貧乏華族ですから」

「はあ貧乏か其ぢや特に丁寧になくとも可かつたんだ：：爾すると富豪の方では大村富喜子、是れは醫學博士だよ、其れに夫人は子煩悩だから」

「でも病院では患者に氣の毒ですから」

「あゝ好いがある、是なら大丈夫だ、南篤子、此奴は成金の大将だせ」

「さあ、彼處の邸なら充分ですけれども、篤子さんを餘り可愛がつて居なさらない様ですよ：：」

「煽てたら什麼にかなるよ、成金といふ奴は何でも無暗に威張りたがるもんだ、當人は酷く利巧振つても根が馬鹿なんだからね、其れに華族女學校へ行てる娘さんがあるさうぢやないか、何處かの華族の若様が御嬢様に一度御目に掛りたいと言てるとか何とか言ふと屹度乘氣になるぜ」

「ぢや行て見ませう」

「車で行くのか」

「いゝえ電車で」

「吝つたれた事をして見せるなよ、自働車で行け」

「でも其れでは」

「まあ自動車で行け、何處かの華族様へ伺つたら貸してくれたと言て聞かせるん

だ」

「なる程爾です、其れちや片道だけ」

「客だな、往復だ」

假名子はいそ／＼と自動車に乗て校舎を出た、で約二時間も経て彼女は喜び勇んで歸つて來た。

「什麼だつた」と前原は椅子を離れる様に身體をせり上げた。

「上首尾でした」と假名子は腰を下して鈴を鳴らして女中を呼びながら良人に向

ひ「御祝儀を什麼しませうか」

「往復だね」

「いゝえ片道」

「なに？」

「南さんの奥様が其那華族さんの自動車なんかは歸してしまへ、御歸りには宅の自

動車で御送りするからつて其りや上機嫌でしたよ」

「其奴は可かつたな、好い鹽梅だ、して……」

「あの事を話しましたらね、初めは變な顔をして、篤子には困りきるの學校にも恨があるのと言って中々承知しさうにもなかつたけれども、私が随分油を掛けもしたし、例の華族様の一件も話して大分氣が動いて來た處へ環さんとかいふ娘さんが見えたもんだから私御世辭の有つたけ振蒔きましたのよ、爾するとあの女ももう夢中になつて、娘の御茶の手前を見て行つてくれ、踊を見て行てくれ、琴を聞いてくれ、其や是やで二時間も費つて其れから御飯をといふのを漸と振絶て……」

「其れは可いが、肝心の話は？」

「其れです、私の邸では狭過ぎるから星ヶ岡の茶寮を買切てあげやうと恚ういふのよ」

「ふうむ、其れは可かつた、好い鹽梅だ」

「其れに別に百圓の寄附を」

「ふうむ、其れは可かつた、好い鹽梅だ」

「處で自動車の御祝儀は？」

「まあ五十錢を要するね」

「五十錢？」

「眼を圓くするな、百圓の二百分の一だ」

假名子は帯の間へ手を掛けた處へ女中が見えた。

「お召びで御さいました」

「あの自動車のお祝儀を」

「もう歸りましてございます」

「歸つたの？」

「其れは可かつた、好い鹽梅だ」

二

奉書摺の案内状は幾百通となく飛んだ、入場券が數千枚、當日の晴天を祈つて生徒達は準備に熱狂した。活花室に茶の湯の室、琴、洋絃、三味線、遊戯、體操、流石に踊だけは遠慮したが其の代りに活人畫の趣向もある。娘の技倆を見せたいといふ母親は其れ々秘密の運動をして校長夫婦の懐を肥やす、一年に一度の此會は實際校長大當りの書入日で其れに媒灼の十組も出来れば一年間の臺所は心配が要らぬ。

若い生徒達は元より其那事に氣が付くべき筈がない、どうかして盛會にした。御天氣にしたい、自分の學校を賞められたい。其の一念で寄宿生は殆んど眠る暇もない。裝飾の花を造るやら、幕を縫ふやら、徽章を拵へるやら、毎夜十二時を過ぎても一つの教室に集つて笑ひさゝめいた、恚ういふ事は少女達に取ては

此上もない楽しみで、後日浮世の波に揉まれる様になつても忘るゝ事の出来ない記念である。

「什麼も晩くまで起きて居られては電燈のメートルが上がつて仕様がありませんね」と假名子は呟した。

「全くだ、明日から朝の五時頃から取掛らせるが可い、爾すると夜は眠くなるだらう」と校長が言た。

當日の前夜からお時は環の身装に氣を揉んだ。何處までも上品に華族の令嬢らしく扮りたい、頭は高島田にしやうか、いや其れよりも彼子は頭を真中から分けて兩方に髪を垂らしダイヤ入の帯をさした方がハイカラで好い、堀井伯爵の御嬢さんも爾いふ頭であつた、頭は其れで可いとして扱つて着物は：：恁那考への中に彼女は多くの若い貴公子達が眼を欲だてゝ環を振り返り、何處の令嬢だらう、何といふ美しいんだらう杯と囁やく中を自分と環が澄まし返つて通り行く光景を想ひ

浮べた。「力も伴つて行かう、他の娘を見たら些とは環の難有味も解るかも知れない」

翌日は大騒ぎである、髪結、踊の師匠、女中の御勝、三人は手よりも口の方が忙がしく囁し立て煽て上げ、而してお時の顔色を窺つてはお世辭を並べ立てた。

頭が出来上ると環は口叱言を言ひく毛筋を入れて風呂に入り、それから身仕度に取掛る。

「お母さん襦袢は何れを着るの？」

「どれでもお前の好きなが可いよ」

「あんまり澤山に御有り遊ばしますからね」

と髪結が口を出す。友禪の羽二重、縮緬、墨繪、数々あれど御機嫌を窺つて是ぞといふものもない。

「無地が可いよ、上品だから」とお時が言ふ。